法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

ヴァレー地方風土鈔 : 山の民と自然

加太, 宏邦[訳] / KABUTO, Hirokuni / RAMUZ, Charles-Ferdinand / ラミュ, シャルル フェルディナン

(出版者 / Publisher)
法政大学多摩論集編集委員会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Hosei University Tama bulletin / 法政大学多摩論集
(巻 / Volume)
23
(開始ページ / Start Page)
29
(終了ページ / End Page)
99
(発行年 / Year)
2007-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003165

ヴァレー地方風土鈔

― 山の民と自然 ―

シャルル・フェルディナン・ラミュ（加太宏邦・訳）

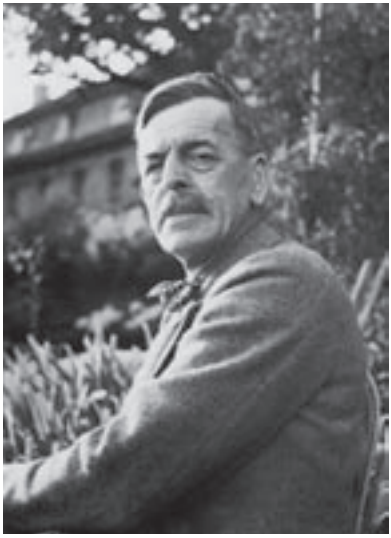
訳者による緒言と解説

本稿はCharles Ferdinand Ramuz: *Vues sur le Valais*の全訳である。あらかじめ緒言として、解説を兼ねた小論考を付して読者の理解に供しておきたい。

C・F　ラミュについて

シャルル・フェルディナン・ラミュCharles Ferdiand Ramuzは、一八七八年九月二四日、スイスのヴォー州（カントン）の州都であるローザンヌの中心街アルディマン通りに生まれた。父は輸入食料品店を営む商人であった。ローザンヌ大学で文学を専攻し、近郊のオーボンヌ町の高校の自習監督（メートル・デチュード）をしばらく勤めるが、すぐに退職、パリへでてソルボンヌで学位論文を書く準備に入る。しかし、四年ほどで、興味を失い帰国。パリ生活の経験から彼は〝ヴォー人〟である自分のアイデンティティを徐々に自覚しはじめ、この意識を基底に据えて文学生活に身を投じようと考え始める。

詩集『小さな村』*Le Petit Village*（一九〇三年）と小説『アリー



Ｃ．Ｆ．ラミュ（1945年）＊

ヌ』*Aline*（一九〇五年）が彼の出版作品としては最初のものとなる。一九〇四年ごろから同人雑誌の出版を手がける。とくに、一九一四年郷土の文学仲間たちと集って『カイエ・ヴォードワ（ヴォー手帳）』*Cahiers Vaudois*の刊行を行う。一九二〇年まで続いたこの文芸雑誌出版はスイス・ロマンド地方（スイスのフランス語圏）に自律的な文学活動を巻き起こした記念碑的な活動となった。とくに、文学青年たちの文化活動の拠点になる。

一九一八年、スイスに滞在中のイゴール・ストラヴィンスキとの親交を深め、ラミュの書いた『兵士の物語』*Histoire du Soldat*にストラヴィンスキが曲をつけたこの作品はその年の秋に初演され、その後も有名なせりふ付管弦楽として世界中で上演されるようになる。

次々と小説や評論を発表し、一九二四年以降は、多くの作品がパリのグラッセ書店から出版された。しかしフランスでの知名度は高いとはいえなかった。素材と舞台がスイスの、しかも山岳農村地帯であったことが、ラミュという作家に対するある種の先入主を与えていたと思われる。

彼は、特定の地域に生活拠点をもつ作家ではあったが、フランス人がそう理解するような意味での「地方主義作家（レジオナリスト）」ではなく、また、農民世界を素材とする作家ではあったが、農民の視点に立つ「農民作家」でもなかったのである。彼はそう評価されることを嫌い、しばしば自己の立場を明らかにしていたが、この誤解はフランスでは死後も長く続き、日本でも、農民作家と言われる和田傳などが自らの同志ではないかという思いから、ラミュに感動、『贋金つくりファリネ』*Farinet ou la fausse monnaie*を一九三九年に翻訳したりしている。また文通もしていた。石川淳も若い頃、

ラミュとストラヴィンスキ（左）＊

ラミュの『悩めるジャン・リュック』*Jean Luc Persécuté*を邦訳したことがあるが「なんでえ、つまらねえ、こんなものとおもった。お百姓の若い衆がばたばたする小説で、およそわたしの好みにかなはない」と後に述懐している（ちなみに翻訳したのは人に奨められ、金のためにしたのだという）[1]。

ラミュは、生活する場所や素材に関わらず、「普遍」的な文学創造の可能性の追求をしようともがいていたのである。パリに、少なくともフランスに、集権的に蓄積されてきたフランス文学は、フランス語文学に必ずしも寛容ででない。とくにスイス人ラミュの場合は、母語であるフランス語以外での著述が可能でないのにも拘わらず、その国籍や居住地で「地方作家」に括られる偏見にさらされていたからである。

一九三〇年にレマン湖畔のブドウ畑の村ピュイに屋敷を購入し、そこを「ラ・ミュエット荘」（猟小屋）と名付け、そこが終の棲家となる。一九四七年五月二三日亡くなる。

今日では、ラミュは、二〇世紀スイス・ロマンドが生んだ最もすぐれた作家の一人としてスイスだけでなくフランスでも評価が定まってきている。日本における夏目漱石にも似た「国民作家」としての扱いを受けるようになったのである（ただし、作風や関心の対象などあらゆる点で漱石とは類縁性はない）。日本で、世代的により近く作風もやや近い（言うまでもなく「やや」でしかないが）作家としてあげるなら、島崎藤村や有島武郎などを挙げることが出来よう。とくに藤村は、詩人として出発し散文へと移行したことや、郷土を舞台に、そこに生きる人間の姿を素材とする作品がみられることなどの共通点をあげることができる。藤村は信州人ではあるが、彼を有名にした小諸は彼の出身地ではない[2]。その意味ではラミュもスイス・ロマンド人ではあるが、この作品で描かれるヴァレー地方の人で

ラ・ミュエット荘＊＊

はないのである。しかし、両者とも、この地の風土を描くことによって自分のアイデンティティを見出す契機にしたいという意識を持っていたという点では通じるところがあるといえる。

作品について

『ヴァレー地方風土鈔―山の民と自然―』は一九四三年に書かれ出版された。ラミュ晩年の作だといえよう。ヴァレー地方をアルプスの誕生から説き起こし、そこに住み着いた人々の生活と風土を共感をもって描いた中篇エッセーである。この作品にいきわたっている意識は、失われていく（いった）文化を記録しておこうという思いである。近代化の波にさらされ、古来から継承されてきた労働のスタイルなどが急速に失われていくことへの哀惜と、生活文化全般にかかわる伝統喪失への痛ましい思いを山の民の生活や風土に託して描いている。

これは消え行く風土へのオマージュというだけでなく、ラミュ自身の根っこの喪失ににたいする悲愁ともいえる。それは、彼が、あえてパリから離れ、スイス・ロマンド地方にしがみつくようにして描き続けた文学的な営為の根拠の消滅であるからである。

ところが、皮肉なことに、この本を企画したバーゼルの出版社のもくろみは、観光化され、道路が整備され、ホテルが林立し始めたヴァレー・アルプスへの大衆的関心に乗じようというものであった。しかしながら、この企画をラミュは断りにくい事情があったのだ。その理由は彼が金銭的に逼迫していたからである。体を悪くしていて治療代がかかる上に、第二次世界大戦のあおりで、パリの出版社からの印税が入らなくなっていたのである。このためであろうか、筆致は正面からの近代化批判を回避し、むしろ滅び行くものへの哀惜のやさしいまなざしにおおわれているようである。また、アルプス地帯の地理的な誕生から説き起こすような突き放したような展開を導入部に用いているのは、おそらく、実態的形象を見せつつ、世界を象徴的に描くラミュらしい独特のリアリズム手法であるとも言える。なお、その地理学上の記述の典拠は、知人のエリ・ギャニュバン（ローザンヌ大学地理学教授）から仕入れた知識だ

と言われる。

作品は、バーゼルとオルテンのウルス出版から一九四三年一一月に二一〇〇部（内一〇〇部はナンバー付豪華限定版）が出版され、その二十一年後の一九六四年に、版を改め、同じくオルテンとローザンヌ、ドイツのフライブルクから出版された。その後、どういう事情からか、全集にも収録されることなく、ながらく人々に忘れられていたが、一九九四年にラミュ学会がテキストのみの版（初版には写真が付けられていた）を、フランスのトゥールのフランソワ・ラブレー大学から出版した。いずれの版にも、校訂についての解説や注釈の類がないので、今回、翻訳に際してこの解説文と、拙訳に付けた注釈でその補いとした。

ヴァレー地方について

描かれるヴァレーはスイスの行政的区分で言えば、ヴァレー州（カントン）である。ほぼ全域を山岳が占め、四千メートル超の高峰が五一座ある。面積は五二二五平方キロ（愛知県とほぼ同じ）、人口はわずか二七万八千人（二〇〇五年）。この州には、しかし、一五三の市町村（コミューヌ）がある。この百年間でわずか一三しか減少していないということは驚くべきことである。ちなみにここの約二六倍の人口（七二八万人）を擁する愛知県には現在六三市町村しかない。ヴァレーが、このわずかな人口で、一五〇以上の自治体を維持させているのは、スイスの伝統的な自治意識によるものなのだが、ここにこそラミュが称揚する村落共同体のそれぞれ固有の風土があるのである。固有性を保持する生活風景こそが郷土愛を育む条件であり、だからこそ、ノスタルジアの根拠となるのである。ついでながら、信州とか馬籠という地名と深く結びついていた島崎藤村を、市町村合併の結果、岐阜県人に籍替えしてしまうというような乱暴なこ

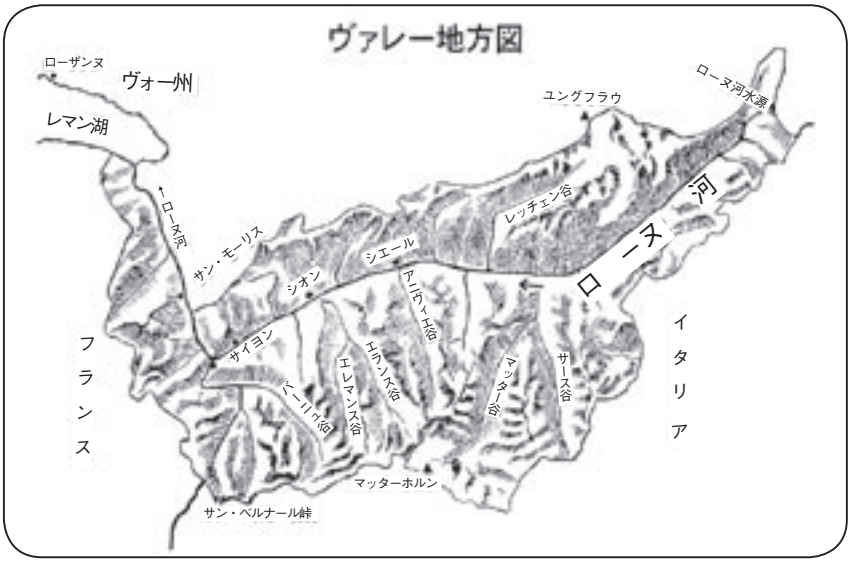
スイス全図とヴァレー地方

とを平気でする国には故郷へのアイデンティティは育ちにくいだろう。

現在では、冬のスキー、夏のトレッキングなどの保養地として著名な観光地となってはいるが、ここに描かれるラミュのヴァレー地方はいささかも観光ガイド的でないし、絵葉書的でもない。

ヴァレー州は二言語州で、州の西側のほぼ半分を「下ヴァレー」（Bas-Valais）といい、フランス語圏に属する。東半分は「上ヴァレー」（ドイツ語でOberwallis）と呼ばれ、ドイツ語圏なのである。州都はシオンで、フランス語圏にある。全体では、フランス語人口六に対して、ドイツ語人口は三、その他が一である。その言語国境は、本書にも出てくるシエールの町（正確には近郊のラスピーユ村Raspilleが国ざかいになる）である。この作品に描かれるのはおもにシエールより西のフランス語圏ヴァレー地方であるが、「なまはげ」にも似た奇祭で知られるキッペル谷や、マッターホルン観光で有名なツェルマットなどはドイツ語圏にある。またローヌ河の源流はドイツ語圏側にある。

ヴァレー地方は、一九世紀まで「スイス」ではなかった。六世紀以来長らく、シオンの司教の支配下にあり、全域が司教領



であった。司教座のあったシオンのカテドラルは要塞教会である。スイス連邦に加盟したのは、ナポレオン体制崩壊後の一八一五年のことである。したがってヴァレーはスイス連邦が成立した一二九一年からみると、もっとも遅れてスイスに参入してきた州（カントン）の一つだと言える。ヴァレーは、人々の意識にも、「州」という行政上の区分より、「地方」と呼ばれることを自然だと思う感情がある。ラミュも本文で一度も「州」とは呼んでいない。定冠詞をつけたヴァレー、すなわち「ヴァレー地方」である。長野県というより「信濃」という呼び名が土地の姿を喚起するのと感じは似ているかもしれない。

ラミュとヴァレー地方

さきほど述べたようにラミュはヴォー人なのだが、彼の作品の多くは、その素材と舞台がヴァレー地方に求められているのは興味のあることである。『山の恐怖』*La grande peur dans la montagne*『贋金つくりファリネ』や『日が昇らなければ』*Si le Soleil ne revenait pas*など代表作の多くがヴァレー地方を舞台とた作品である。彼のヴァレー地方への関心は、ヴァレーを描いた『山の村』*Le Village dans la montagne*という中篇のエッセーをすでに今回の拙訳『ヴァレー地方風土鈔―山の民と自然―』にさかのぼること三五年の昔に発表していることからも分かる。

ラミュとヴァレーとの直接的な繋がりは一九〇六年、彼がアルプスの村ランス（標高一一二八メートル）にある友人の山荘に滞在したことから始まる。ラミュは、彼の生活圏のヴォー地方とまったく異なる風景に感銘を受けた。たまたま、その直後、一九〇七年に出版社パヨが、彼にヴァレーの山の生活についての著作を依頼してきた。それは、ヌシャテルの画家エドモン・ビルの挿絵との共作本だということだった。そのために、彼はヨーロッパ一標高の高いシャンドラン村（標高一九六〇メートル）に山荘を持つビルのところに滞在し、これがきっかけとなって、ラミュとヴァレー地方とのつよい縁が生じたのである。彼はこの村の風景に「恐ろしいまでの悲愁を感じ」「口が利けなくなった」と述懐している。依頼された作品は『山の村』（一九〇八年）として発表される。ところが、それは激しい

感動が反映した作品というよりは、藤村の『千曲川のスケッチ』にも似た、写実的で淡々とした村の生活の描写になっている。彼が、ヴァレーから受けた強烈なインスピレーションは、実は、同時執筆していた小説『悩めるジャン・リュック』にむしろ投影されている（石川淳が翻訳したのはこの作品である）。彼の当時の関心はもっぱら小説にあったからである。しかし、いずれにしても、その後も、作家生活のほとんどの期間にわたってラミュはヴァレー地方の厳しい風土と悲劇性に強い意識を働かせ続けたことは事実で、一度はヴァレーに居を構えようと思ったことさえあると言われる。

前述したとおり、ヴァレーは二言語地域である。ラミュの関心は、パリ文化と対抗的な風土だけでなく、フランス語圏をも超えたところへも向けられているのである。ラミュは若い頃ドイツのワイマールで貴族の家庭教師をしたこともあり、多くのスイス人同様、ドイツ語文化への抵抗はなかった。

また、ラミュはローザンヌに育った都会的作家であるが、ヴァレーは完全に山岳農村地帯である。この点でも、ラミュは自分の来歴や育った環境から異質なものへの嗜好も持ち得た作家であった。

プロテスタント色の濃いローザンヌの人であるラミュには、中世的カトリックでおおわれているヴァレー地方は、この点でも異次元の世界である。ラミュの資質からいえば、教義としてのカトリックは、「受け入れられない」のだが、それとは別に、ヴァレーの土着的な信仰とない交ぜになった素朴な宗教習俗にはおおいに関心を寄せていた。ラミュの小説には、しばしば山への恐怖や、自然の中に突如として顔をのぞかせる異界の存在への畏怖が揺曳している。登場人物が、説明のつかない不条理な宿命を前にして立ちすくみ、やがて身を滅ぼすのである。これは合理を建前とするプロテスタントには見られない物語り世界といえよう。

ラミュがこれほどまで、ヴァレー地方に関心を抱き続けたことを、彼自身が長年の友人のヴァレー作家モーリス・ゼルマッタンに宛てた書簡でこう述べている。「それは、ヴァレー地方が、私が抱く原初的とか本源性とかへの好みに合致しているからかもしれない」。この「好み」は、ラミュの文学観の根底をなしている、少なくとも重要な一点

である。ラミュはパリ中心のフランス語文学権力圏にその身を置きながらも、あえて、パリからは距離を置き、故郷の風土を素材としながら、文学的普遍性を目指すという困難な挑戦をし続けたのも、この一点があったからである。二〇世紀文学の潮流としては決してスマートはいえない姿勢を保持しながら、作風、文体を刻苦して作り上げていくのである。この姿勢は、九歳年下のブレーズ・サンドラールなどとは好対照であった。同じスイス・ロマンド出身でありながら、サンドラールは世界に飛び出し、故郷喪失を標榜するからである。

ヴァレー地方はラミュにとっては、そこに根を生やす必要があった仮想の故郷であったのかも知れない。

ノスタルジアと風景

さきほど哀惜の念と言ったが、この感情に貫かれている文学をノスタルジアの文学と名づけてみたい。

ノスタルジアはもともとは時間に関する概念ではなく、空間についての憂いを表すものである。望郷とか懐郷という訳語がそれにあたる。そこから転じて、時間への哀惜をも表すようになった。すなわち懐古とか懐旧の念という用語がそれにあたる。周知のように、ノスタルジアという語は、一七世紀、ヨハネス・ホファーという医師が“Dissertatio Medica De Nostalgia”（ノスタルジアについての医学論文）で用いたものが初出と言われ、スイス人の傭兵が異国で神経症にかかる例が多いのに着目したことがその研究のはじまりだった。この傭兵の治療はアヘンとアルプスの村への帰還で快癒したという。いわゆるホームシック（ホファーはドイツ語でのHeimwehと同義語だとしている）であり、郷愁病である。

フランス語でnostalgie de la boueという表現があるが、これは自分の生育地への望郷の念をより具体的に示し、「土への郷愁」を表わす。ここから自然回帰とアイデンティティの結合が生れるのである。その先に、反文明志向が導かれる。スイス人ルソーの言う人間の原初状態に帰るというのは、言い換えれば、人間知（文明）への懐疑であり、それはロマン主義を生み出し、その先では、ハイデッカーのいう「故郷喪失」という現代的問題にもつながる大きな

テーマも生れうる。今は、この問題に立ち入らないが、理念としての故郷から祖国愛、祖国愛からナショナリズム、そしてナチズムへと結びつけることも理屈としては可能だ。もうひとつの回路は、〝環境主義〟であり、この両者は、通底している。

この郷愁は何を原因としているかということに限って考えてみたい。一九世紀のロマン主義におけるノスタルジアは、おおまかに言うことを許されるなら、宗教と王権という価値規範の弱体化に由来する、寄る辺ない〝自由〟が苦し紛れに代替物を希求する時代精神の表明であった。それは、たとえば、ボードレールにおいては「見知らぬ郷（くに）へのノスタルジア」であり、モーパッサンにおいては「人知れぬ砂漠の郷」へのノスタルジアであった。この漠たる〝世界の外ならどこでも〟の希求が支配する心情的不安が十九世紀のロマン主義の底流を成しているのに対して、ラミュのノスタルジアは、風景の喪失や伝統風俗の崩壊に対するより具体的な悲愁の念であり哀惜の念である。

ラミュの同時代人（一歳年下）の永井荷風がフランスから帰国後に、江戸下町に寄せた思いと、ラミュの思いは実は同根なのである。荷風における向島や深川の風景は、実体としては、スイスのヴァレー地方とはまったく異なるし、荷風がそこに求めたものはボードレール的世界の薄暗がりや陋巷の悲愁である。一方、ラミュが求めたものは、その逆の健全で素朴で古代的な山間の生活空間（まさにヘシオドス的な）であった。しかし、この両者には、都鄙の違いこそあれ、産業化する現在を否定する形でのノスタルジアが色濃く表出されている。すなわち、物質的・経済的繁栄、進歩や変化、利便と効率、価値の世界化・普遍化などの近代合理精神へ背を向ける姿勢である。ノスタルジアとは人間の身の丈への回帰願望であると言い換えることができるとするなら、それは、交通、情報、経済、機械などが身体の延長になることへの拒絶という積極的な一面をも持つことになるのである。頑なに後ろを向くこと。さらには、身を竦（すく）ませること。

たしかに、ラミュでも、そのノスタルジアはある特定の風景を見据えた憧憬や礼賛を粧っている。しかしながら、それは、自らが、生きてきた具体的な過去の空間への回帰というよりは、理念としての、失われつつある〝過去〟の

風景への憂いと悲しみのまなざしなのである。このエッセー作品の真髄はノスタルジアとしての風景の読み取りにこそあるのでないだろうか。

注(1)　「ジイドむかしばなし」『文學界』昭和二六年四月号。

注(2)　藤村の生誕地は長野(筑摩)県木曽郡山口村神坂馬籠であり、二八歳で教師として赴任したのは信州小諸町であった。馬籠は二〇〇五年、いわゆる越境合併により岐阜県中津川市の一部となった。

なお、本稿で用いた版はC.F. Ramuz: *Vues sur le Valais*, Editions Urs Graf, Bâle et Olten, 1943であるが、時にUniversité François Rabelais, Tour, 1994版を参照した。

参考文献

- C.F. Ramuz： *Oeuvres complètes*, 5 vols, Edition de Rencontre, Lausanne, 1973
- C.F. Ramuz： *Lettres 1919-1947*, Les Chantres, Etoy, 1959
- C.F. Ramuz： *Montée au Grand Saint-Bernard*, Les Amis de Ramuz, Université François Rabelais, Tours1989
- C.F. Ramuz： *Nouvelles, Croquis & Morceaux 1904-1920*, 3 vols, Slatkine, Genève, 1982-1983
- Georges Duplain：*Le gai combats des Cahiers Vaudois*, Editions 24 heures, Lausanne, 1985
- Georges Duplain：*C.F.Ramuz, une biographie*, Editions 24 heures, Lausanne, 1991
- Théophile Bringolf et Jacques Verdan： *Bibliographie de l'oeuvres de C.F.Ramuz*, Baconnière, Neuchâtel, 1975
- *Dictionnaire historique et biographique de la Suisse*, 7 vols et 1 supplément, D.H.B.S. Neuchâtel, 1921-1934
- *Dictionnaire géographique de la Suisse*, 6 vols, Attinger, Neuchâtel, 1902-1910
- *Dictionnarie suisse romand - particularités lexicales du français contemporain*, Ed. Zoé, Carouge-Genève, 1997

- Doyen Bridel : *Glossaire du Patois de la Suisse romande*, Lausanne, 1866
- Hirokuni Kabuto : *Introduction de C.F.Ramuz au Japon*, La Revue des Lettres Modernes, Minard, Paris, 1985
- Hirokuni Kabuto : *Ontologie de la littérature romande*, Ecriture No37, Lausanne, 1991
- Hirokuni Kabuto : *Réception décentrée de Ramuz ou le centralisme littéraire*『社会労働研究40－3・4』一九九四
- 加太宏邦　「ラミュの写実と象徴」　ROMANDIE　スイス・ロマンド文化研究会　一九八七
- 加太宏邦　「口碑のヴァレー地方」『商学研究39－1』（関西学院大学）一九九一
- 加太宏邦「フランス語圏の民話について」『スイス民話集成』（スイス文学研究会訳）早稲田大学出版会、一九九〇

小見出しは、ラミュが原著の欄外に手書きで付け加えたものを利用した。

挿入した図像のキャプションは訳者によるものである。なお、各キャプションのあとについているアステリスクは、出典をあらわす。「無印」は原著から、「＊」は訳者所蔵の資料から、「＊＊」は訳者撮影画像である。

地図は訳者が加工製作した。

ヴァレー地方風土鈔

― 山の民と自然 ―

シャルル・フェルディナン・ラミュ

ローヌ河の谷の形成　地質学者たちによると、アルプスは、一年に何ミリかずつ低くなっているということだ。これは、どうやら確かなことらしい。ただ、そう聞いても、ふつうは大きな数字ではないと思う。しかし、それはじつは大きな間違だ。きちんと考えてみよう。

この山というのは、もうできあがったものを見ているのだが、一方には時間というものがある。これが無窮なのだ。四千メートルの山があって、これが年に数ミリずつ低くなっても、人間の寿命に比べれば、この先、長い命だとは言える。人間の寿命というのは、宇宙の命の前では、なにほどのものでもなく、私たちが生きている時間は、たしかに一瞬の短さだからだ。けれども、このアルプスだってじつはほとんど目にも止まらないほどの短い命なのだ。

つまり、私たちのアルプスも間もなく無くなり、そそり立つ峰々も一葉の紙のように平らになってしまう。やっとのことで幾世紀もの時間の重なりを抜けて来た峰とはいえ、とどのつまり、その時間の中にあらゆるものは呑み込まれ、当の時間の方は古びることがない。

山々は、消えるだろう。が、かつては抗い難い力で出現したものであることも確かである。ただ、それはあまりにも緩慢で、おそらくそこに人がいても、いや、いく世代が束になっても、まったく気付かれることもなかった緩慢さだったはずだ。

波が、といっても大地の波だが、この波が正に最高峰の頂まで到るには、一ミリ、また一ミリとせり上がっていったのだ。一世紀で何ミリというていどかも知れない。でも時は涸れることはない。

私たちは液体の動きは感覚として理解できる。川、滝、波など、こういうものは、傾斜さえあれば、下へ向かう性質があり、気圧のもとで気化する性質もある。傾斜がない所では、液体は静止するし、風が吹きやむ所では、液体は落ちつくことはよくわかっている。しかし、私たちのような、一瞬の時を生きる人間にとっては、大地は見えてこない。大地は、足下にあり、私たちや家々を支えてくれているので、確固たるもの、と言えるような自然で、さきに言った液体とは別の物質でできているのではないかとさえ思われる。

私たちは、相対性の中に生きているとか、大地は水とそう違わないとか、両者の重量には程度の差しかないとかいう風にはあんまり思わない。私たちは、もし人間の体重がはるかにもっと重ければ、沼の水面に浮く薄い植物の膜に乗ったみたいに、どんな硬い地面にもめり込んでいくはずなのだが、よもや岩石にからだが沈み込んでいくはずだとは思いつかない。それに、私たちにとって硬いはずのものが流体となり、その流体も気体になってしまうかもしれないとも考えない。だいたい、大地も岩でさえもこの上なくふにゃふにゃで、潮のように干満をもっていて、膨張時と収縮時があることも、変形、形成をもたらす力にさらされていることも、たとえばアルプスが、目には、壮麗な姿に写るとしても、じつはひと時も、そういう姿に安んじてはいられないということも考えようとはしない。

安定と見えるのも外見だけである。これは地質学者が言うことだ。

山の壮麗さなど見せ掛け。壮麗に見えても、それは一瞬のこと。

雪をまとい、氷河をまとったアルプスが白く燦めいている。この氷河の装いもひと時のもの。いつかは剥がされ、元のようにくすみ、灰色となり、やがて

ゲンミ峠から見たヴァレーアルプス＊

緑が蘇る。じっさい、アルプスも、かつての成長期には全山、緑と叢林に覆われ、植物にも似た成長力にめぐまれ、押し合いへし合いの淘汰があって、時に隣同士重なり合い、時に隣の峰にせせり出て、よその斜面に峰をつくったりすることが初めのころにはあったのだ。

＊

ベルン側にはアルプスがなかった　地質学者に訊くと、ヴァレー地方の南のイタリアとの国境（つまりヨーロッパでは一番広域にわたる一番代表的な谷の集まっているところ）は、かつてはかなり標高の低い環状の皺みたいなもので、その尾根筋は現在のローヌ河[1]と平行に東西に走っていたらしい。ローヌ河は今のベルン州あたりに流れ込んでいたという。つまり谷筋はどれも北へ開いていた、標高千メートルにも至らない稜線が一本、何万年もの太古にはあったという。しかし、繰り返すが、これは永劫からみて一瞬にもならない。それは、私たちの頼りない精神というものを思い浮かべてみれば、時間などは未だ始まっていないにひとしく、しかもこの時間には、果てがないのだ。この時間を正面にすえて、過去から現在、そして未来にわたって、おなじ調子で変容し続ける世界のほんの一隅を観察してみようというのだ。

往時は、ここも椰子の繁る斜面で、怪獣が（というか、今の私たちのような文明化された小市民には、怪獣のように見える動物が）棲息していた。それは、気候が変化し生起していくからで、その変容の理由は大地の持ち前の性質とか、海面からやや高い標高のせいでもあるし、また一方、地軸周辺での地球の振り子運動のようなものの結果でもある。かくて、私たちのヴァレー地方をさして、土地の人が、いにしえの郷土（さと）だと言うけれど、実際は、今、目の前にあるのは、ほんとうに新しい郷土で、往時は正にアフリカ気候の中にあったわけだ。背の高い椰子の木が繁っていて、その大地の上を異様な様子をした動物がゆったりと移動していた。これは、博物館に化石の断片が保存されている。鳥と爬虫類との橋渡しになるような種だ。翼のある巨大な鰐とか、歯が備わった長い顎をしたトカゲである。

小川がいくつも流れていて、そこに動物は水を飲みに行ったのだろう。今と同じ音をたてる渓流とか滝もあったに

ちがいない（音だけが今も昔もおなじだ）。そして、渓流も集まって川となり湖に注いでいた。

湖の位置というのは、今のベルン州にあって、かんたんにそれは分かる。ただ、今のアルプスはなかったので、水は自由に流れていた（アルプスと言っても正確にはベルン・アルプスのことだが、これはヴァレー・アルプスより後に形成された）。これらの地殻変動、つまり今までみてきた大地の押す力の結果として、また、私の能力ではよく解りかねる理由で、なめらかな傾斜をもっていたこの斜面が、徐々に部分部分で違う形に変化し始めたのである。

すなわち、今日のローヌ河にあたる位置の北側で、いくぶん隆起の傾向が生じたのである（もちろん何万年という単位でであるが）。土地にいくらか上昇の気味があり、このため、水流が下る道を邪魔し、塞いでしまった。水流は北へ下ることが出来なくなって、向きを変え始めた。西下である。この間、南側の峰も隆起し続け、今日の北側の山脈も同じように隆起し続けた。結果、この二つの山脈の間にいわゆる谷筋らしいものが形成され、やがて、谷として完成していく。二千メートル、三千メートル、ついには四千メートルのところも出来るほどの隆起をしたこの二つの山脈の間にできた水の住処であるとも言うべき、ひそやかな襞部分の底は、平均にして五百メートルそこそこの標高ではあったが、天井の開いた部屋のようなものだった。それは、まだ下流部分が閉じられていたからである。

時は流れ、さらに流れ、山々は隆起を続け、ある時ふと止まった（そしてふたたび下がりはじめる）。その間に、先史時代の巨大動物は姿を消した。暑かったのが、熱暑がなくなり、寒くなり始めた。やがて、地質学者が言うところの氷河期が継起した。つまり、氷河の消長の繰り返しである。氷河は、一時はレマン湖を覆うようにまで領域を拡げたこともあった。それから、後退し、また襲ってきたりし、たしか三度目にわたってこれを繰り返した。氷河の背というのは、青いクレヴァスの傷痕のついた蒼白い背で、砂礫をいっぱい載せていて、これを遠路はるばる運んできて、行く先で置き土産にぶちまけては退却していくのだ。

＊

氷河期　こういう条件では、今や、固体となった水の巨大な分厚さの下に隠れてしまった地域のただ中でいったい

生物が生き延びていたのかははっきり分からない。なんらかの地衣類しか生きていないかもしれない。もしかしたら、かつて覆っていた山脈の頂上あたりへ、氷河がまたせり上がりだした頃（あるいはまた下り始めた頃）、何らかの抵抗力のある樹木とか針葉樹が、結果として、こういうことから逃れられた場所に一時的に、繁殖地を移してきたのか、それも再度の氷河期でまた一掃されたのか。

こういう点でも、時間が問題となる。私たちは、そういう二つの大事件も、なにか並んでいるように思い込んでいる。が、ここでも、二つの大事件の間にはいく百世紀という時が挟まっていて、実際の侵出、浸食はポツポツとした間隔で発生している。しかもそこには、潮流にも見紛う岩塊でできた滔々とながれる巨大な流れのようなものがあって、これが、その力でもって流れつつ岸辺を造り、深い河床を掘り、岩組を粉砕し、根底から山を揺さぶる。到る所、緑色の山肌は剥がれ、濁流となり、その下で岩盤が削られていく。来る日も来る日も、しつこく平らに延ばされていく。それも、たぶん人間の目には見えない（こういう風に、今日にいたるまで、私たちの見るささやかなる氷河も、前進したり後退したりしている。しかし、そういうことを感知するためには、万能の尺度計とでもいうようなものを導入することが必要なのだ。私たちの目だけでは足らないからだ）。

毎日毎日、なんセンチメートルかずつ進み、それでもそれを好きなだけ（年月は無くならないから）何年も重ねれば、何キロメートルという堆積となる。扇状に四方へ延びている長い触角が、とまどい、右に左に大地を手探りし、それから、恐る恐る大自然のなかに、用心深く、戸惑いながら身を縮めていく。

大自然というものがあって、その本体から氷河は生まれ、また呼び戻されていく。その最中に、氷塔（セラック）は、山のように巨大で、地響きを立てて崩壊していく。クレヴァスは口を広げ、深淵の底に澄明な蒼い色を見せ、やがて徐々に、谷（侵入してくる奔流の逃げ道となる）の斜面が、きれいに均され、磨かれ、擦り取られて、すべっとした岩床を見せ始める。岩床は、もちろん斜面をつくりあげてきた層で、その成層が露出したのである。

とうとう、氷河は本来の場所を占拠する。本来というのは、私たちが今日にいたるまで、見慣れている今の場所の

ことなのだが。で、その場所で今は、氷河は斜面に張りついたり、峡谷にもぐり込んだり、高地の上に悠々と広がったりして停滞している。しかし、これを観ようと思うなら首をそっくりかえらせねばならない。上方、はるか上方に、曙をいっとう最初に捉える氷河、太陽をいっとう最初に捉える鏡の氷河、そして、私たちの場所ではもう沈んでしまった太陽の光がまだたわむれている鏡の氷河がある。空の中で薔薇色に、次に菫色になり、そしてさいごに蒼ざめて、闇となり、死人の顔色のような鉛色となるあの光がそこにある。

今日もヴァレー地方を取り囲み、この地方の冠の飾りのようになっている氷河は、まさにそこが地理的な境界となっている。でも、それと対面するには、三千メートルまで登らなくてはならない。

*

氷河の後退　このころのことだろう、おそらく生命が再び現れたのは。生命は植物と動物、それも、今とほとんど似た気候の中でではないかと思われる。氷河は後退し、気温は再び温暖化しつつあった。あるいは、温暖化したので、氷河が後退しはじめたのか。いずれにしても、そういう条件下で、緑の斑点が出現した。そして、この緑の部分が広がり始め、山の斜面を覆うようにして登り、少しでも成育可能だと思えた土地ならどこへでも張りついていき、とうとう花を咲かせ、そうすると昆虫が定住を始め、昆虫のあとには、それを食する動物も生まれる。

それから、樹木だ。樹木は、成育するのに時間がかかるけど、寿命は長いし、冬が来るたびに朽ちたりしないし、また春に零(ゼロ)から開始しなくてよい。今の天候のと同じ樹木だ。それは、おそらくモミの木か。カラマツ、這松(アロール)、もう少しあとにブナ、カシ、ポプラなどか。

これで、この郷土(さと)がどうやって、いわば最終的に、出来上がってきたかが見えてくる。私たちの郷土は、縦約一〇〇キロメートル、幅約四〇キロメートルの木の葉のような形のちょうど細長い買物籠状というか、縁がそそり立ったユリカゴのような形をしている。その木の葉の主脈にあたるのがローヌ河で、ただし、左右の葉脈は対照的でない。というのは、ローヌ河の右岸では、岸は急峻で、一気にベルン・アルプスまで上がるのにたいして、左岸では、たく

さんの傍系谷筋が発達し、入り組んだ山塊の中へともぐり込んでいるからである。

今日あるような形になったこの郷土をこうやって見ているわけだが、この郷土はふつうの郷土ではなく、閉じられた郷土だと言える。とは言え、まだ、ヒトは出現していない。洞穴に、ヒトの生活の痕跡は発見されていない。洞穴自体もそんなに数多いわけではないが、その中には、ほんの幾つかの狩りの道具が見つかったていどで、どうも、そこには、狩りの遠征でやって来たぐらいで、つまり住居ではないと推測されている。この郷土は、まだ未開の土地で、こんな土地を住めるようにするのは並大抵のことではないだろうということは一目で分かることだ。斜面はどこもきつい。しかも四辺到る所がこの斜面で、テントの先端のような頂上に向かって伸び上がり、岩床ですぱっと切れたり、岩壁で塞がれたりしている。もちろん、谷底というものもあり、その谷底は、流れの変化や洪水でいつも大きな変貌を被っている。流れは、行き来するうちに、山裾をあちこち穿ち、蛇行を重ね、自分の元の流れと合体したり、解きほぐれたりしながら、ときにここを流れるかと思うと、あるときは別のところを流れる。その間に、いくつもの支流と支流の間に、中州を創りだし、どれも一時のもので、すぐにまた流れに覆われてしまう。

どこもヒトの住める場所とは思えないし、耕作にむいた場所とは思えなかった。現在、とにかく、イチゴとかアンズを栽培している所も、往時に思いを馳せれば、風の一吹きで一斉になびく葦の群れ、その下で突然の流域変動があり、湿地帯が出現する河川敷だった。正午、真昼ともなると、太陽が、力一杯に雪と氷の原に照りつけ、そこから流れは生まれる。生まれると水嵩を増し、その速度を増し、岸を越え、四方へその浸食の触手を延ばしていく。ヒトがそんな流れの周辺や、現在でも原始林というか処女林の繁茂で覆われた斜面に近づけたとは思えない。そこは、老木の枯れ木が、その屍から生まれ出た木々によって支えられて、朽ち果てながらも倒壊を免れている。苔や羊歯が、灰色の芒を生やした幹の間に急速に成長している。

湖沼地帯にはありとあらゆる種類の渡り鳥が棲息している。カモやガチョウ。長足で長首の渉禽類、つまりサギとかフラミンゴとかツル。花のようにピンクなのや、雪のように白いのや、白と黒で、嘴は朱色で、奇妙なことにまる

で棒杭みたいに片足だけでピンと立っているのもいる。

では、森にはなにが棲息しているだろう。ヒトではない。すくなくともまだそうでない。クマだ。色々な種のクマだ。たぶん、ハイイログマ、ヒグマ、クロクマ。それから、オオカミ、キツネ、オオヤマネコ、そしてそいつらの食糧になる動物。シカ、ノロ、カモシカだ。ヒトは、たまに出没するていどで、それも群れていて、どうやら、棍棒とか石斧とか弓とか矛とかで身を守っているようで、また、これで威圧をしていた。ヒトはこれ以外の方法がなかったのだ。

*

人の定住　そうやって、いつの日か、人は定住を始めた。そして、いつの日か、人は分かってきのだが、ここでは自然が与えてくれるものからしか得るものがないというだけでなく、自分たちの必要を満足させるのに自然を十分に活用すればよいのだ、ということだった。

いつのことかは分からないが、人間がとにかくやって来て、そのときはまず男が一人だったかもしれない。それから男女になり、子を成し、という順だろう。人間は自然から採取はできるが、採取してしまうと、というか採取するだけだと、いつかは無くなってしまうことが分かっている。

*

耕作を始める　それから、自然の生産といっても、それはかなり気まぐれなものだということも知っている。たとえば、冬だってあるし、こうなると、自然も生産をやめている。ただ、夏だって、悪天候とか遅霜などのあとでは、十分な実りはない。自然の産物だけに依存する人間の食生活では、豊作のあとに来る飢餓状態を避けられない。そこで、人間は耕作を始める。穀物は勝手に生える、ということを観察して知っている。繁茂する土地は、見つかるが、それは風まかせの土地なのだ。そこで人間にできることは、風の代わりをつとめることだ。この穀物を採って、ここという気に入った場所に撒くのだ。たとえば、住まいの近く。人間は農耕を発明したのだ。人間は定住をする。人間

は空間の中を、生活の必需品を求めてもう右往左往しなくてよくなった。今までの狩人から農夫になったのだ。もちろん、地表に撒かれた穀物の種は、苦労の末ににやっと実るか実らないかであり、根づくのも大変だった。それで、地面を掘り返すことを覚える。これが耕作だ。それから、動物は旨い食い物だということを、気付いていた。というのは、それまでも、人間の主食ではあったからだ。ただ、それは、動物を殺していくと、いなくなってしまう。だいたい人間が狩りをしていた動物は、かんたんに飼い慣らすことができることが分かり、そのうちでもいく種類かは、乳を出すし、その乳は、美味であるということも分かっていたので、そういうのを家畜化し、加えて、貴重な労働力ともする。牛も馬も、犂（すき）を引くのに向いている。原始的な鍬（くわ）はだんだん消えていく。

人間は、要するに、筋力からいっても躯の敏捷さからいっても、だめな存在なのだが、知力という点で、それを最大限に活用することを知るのである。物事をじっくりと観察し、その自然の現れを、ある部分、自分たちに都合のよいように操作すれば、ことは足りるのだ。もう、自然と対抗して、力ずくで闘うことはしなくなる。自然のなぞを探り、自然は自意識を持たないのに、人間は自然にたいする意識をますます持つようになり、自然を支配する時代へとすすみ、今では、それが際限なくすすんでしまっている。

*

山との宿命的共存　その昔、人間がある谷間へやって来た。川岸にいったん定住を始め、その内、枝になった谷筋のあちこちに入り込んで行った。だんだん種族を殖やしていった。ただ、これはほぼどこにでもあることなので、私たちのことに問題をしぼろう。ある土地に定着するということは、ほとんど普遍的に見られることだし、移住形態から定住形態への移行というのはどの土地でも似たようなことがあるからだ。しかし、ヴァレー地方で、特徴的だったのは、特異な生活条件下に置かれた民族形成なのである。というのは、普通は、その場所というのは、平地かせいぜいがゆるい斜面であるし、空間的にも四方に自由なかんじで開けている。

私たちの郷土（さと）は閉じられた地形で、一、二か所を除いては、越えることのできない障壁で囲まれているのだ。この

郷土は、川にたいしてすら通行をゆるさず、流れは狭い開口部をからやっと抜けて行く。しかもその口も、流れの幅ぎりぎりの広さしかないのである。それに、この郷土はすり鉢の底状で、底は平らだが、すぐに全方位にほとんど垂直の斜面が切り立つのである。

腐植土というのは森の木陰にしか残らない。樹木の根によってやっと土が保持されているからである。この樹林、これを切り倒してしまうと、雨水で土が流されてしまう。見てのとおり、現在でもマルティニ北部からそそり立つ巨大な岩肌は、麓までつるっとしていて、その形は方形である。支えの紐がピンと四方に延びているあの未開人の野営地というか、布製の住居を思わすものがある。こうなるともはや、山は骨でしかなく、まさしく干からびた白骨の色と外見をしている。時刻によっては青白く見え、また黄色っぽくも赤っぽくも見える。それから、陽光で黄金色に見える時もある。

おそらくヴァレー地方全体、少なくともローヌ河右岸は、もし人間の知恵や工夫がなければ全面こういう景観になってしまっていたかもしれないのだ。ここへやって来た人間は考えに考えたにちがいない。もちろん、斜面の土地を耕そうとすれば木を伐採せざるをえなかった。しかし、まさにそのことで土がなくなるということに直面した。土はいやになるくらい抵抗なく流れ去り、一雨降ればもうそれだけで無くなってしまったのだ。今、畑のことを思ってみるがよい。傾斜はほとんどないとしても、空から雨が注がれると、水の力に負けるのはまず一番軽い部分、つまり、表面の砂土と腐葉土。すると、その下の腐植土層が剥き出しになり、小石が露出し、それも一つ一つ水に負けて流され、雨水が土を穿ち、少しずつだが、ある地質的現象が生じ始める。その現象とは、渓谷を作り、谷と谷の間の部分を結果として高い部分として残すということだ。行く末は、腐植土はまったく失われ、その下にあった粘土質とかさらさらの砂岩とか岩だけになる。

＊

棚畑　しかし、人間は知恵というものを持ち合わせている。山岳民族という方法なのだ。山は、そういう人々には待

つことを教えてくれるし、強健な身体を与えたうえで、じっくりがんばらなくてはならないことも教えてくれる。人々は方策を見つけたのだ。斜面を区切ったのだ。今までは区切りがなかったのだ。それを分割した。そこに段々畑を作った。段々には棚がある。棚というのは垂直面と水平面とでできている。一段一段にはかならず水平面がある。その上にまた鉛直面が立つ。徐々に、何世紀にもわたって小さな畑とか葡萄畑が上へ上へと重なって、まるで互いに上下たがいに引っ掛かって、かろうじて宙吊りになった状態を作り出した。

今、どこかで収穫期にある所を見よ。どこでもよい。ローヌ河水面から登ること何百メートルの地点とか、流れ込んできた渓流が穿った峡谷の脇腹とかには、じつに整然と色ハンカチさながら猫の額みたいな棚が、半円状に岬の形をつくり、その半円状がいくつも上へ上へと垂直に連なっている。ハンカチの洗濯物は、じじつ乾燥してきて、水は滴り落ち、少しずつ青ざめ、緑色から黄色へと移ろう。白くなるのもある（燕麦だ）。これが到る所に、黄金色にあるいは茶色にと今や色模様を作り出していくのである。じっさいに上がって見れば、なんと見晴らしのよいことか。

もうびっくりするくらい狭く、またびっくりするくらい段が積み重なっている棚。その端に立ってみると、足下にたちどころに、乾いた石組の囲いとか人の手で造られた法面とかが見える。だが、斜面はその下で見えない。

さて、ヴァレーの郷土（さと）をとくと眺めわたしてほしい。あなたは宙空にすべりだしている。眼下には巨大な窪みがあり、そこをくねくねとした流れが、蛇のようにそのとぐろを解いていく。蛇は日陰では鬱々とした色合いで、陽射しのもとでは炎を纏っている。眼前には褶曲した一個の壮大な岩塊のようなペニーヌ・アルプス[2]が望まれる。

段々畑

森林と牧草地と岩とが交互に重なりあって、鋸の歯状の山頂は針先、鐘楼、尖塔などの形をしたいく千もの頂上で形作られ、独立峰として、あるいは尾根で繋がっている。そのどれもがきらめく雪で光を反射し、まるでいく千もの鏡のようだ。光は倍の強さになって見るものの目を射るので、思わず目を伏せてしまう。

畑とか、さらに下の葡萄園（このあたりから斜度がゆるくなり葡萄栽培が始まる）から見ると、この地方全体の自然体系だけでなく、人手が入って変容を受けた自然までもが一目瞭然である。ぐるっと首を巡らせば、少なくとも立地の良さそうなところは到る所、段々畑や階段道が見られ、それは耕して天に到るという風情である。これは、まさしく、あえて言うなら、天への挑戦だ。天からの恵みを収穫し、自分たちを滅亡させかねないものを、あえて良きものにしようとするものである。雨水は流れ去っては困る。止まって欲しい。陽射しは集められ、その余熱は畦の石組が保持していてほしい。

農作業の厳しさにはだれもが仰天するだろうが、ここは人の手になる重畳たる耕地の層だということだ（これはどこでも見て分かる）。また一方、時間の重畳たる層の象徴でもあるのだ。汗と涙の歳月の積み重ねであり、果てし無い前進であり、絶え間無い試行錯誤の象徴なのだ。気候は、一般に乾燥気味で、水はきわめて遠くまで求めに行かねばならなかった。はるか上の台地の万年雪まで行き、これを、峡谷の絶壁に吊り下げた木製の樋に流すようなこともしたのである。これを次から次へと分枝していった。

＊

いくつもの気候　ここの住民たちも有利な点があった。それは複数の気候にあずかれることだった。平地では花盛

灌漑用の木製の樋（ビッス）＊

りの時節に山ではまだ冬だとかである。ここからは、何時間か歩けば、葡萄の繁る地域へも、また、その荒涼と貧寒の酷さから、極地にも似た曠野を思わすような気候の中へも入れるのだ。谷底でも、今では、人々の努力のおかげで、イチゴ、アスパラガス、アンズなどが成育する。ライムギの畑も所々にある。それから、今は牧草地だけではない。さらに登れば草の丈はいよいよ短くなるし、疎らになる。岩石の部分が多くなり始める。しまいには石ころと苔だけとなる。もう少し行くと苔もなくなり、雪だけ、氷だけになる。数時間歩いただけで、北方へのなん千キロを踏破したみたいなことになるのだ。

気候は、併存しているということのほかに、ここでは耕作地と同様に、重層的なのだ。農耕じたいが、この気候に依存しているのだ。それから、同時に、住居地から人影の見られない所へも行ける。人影があっても、それは弁当の入った袋とか銃とかを担いだ人が通りかかるていどだ。人間くさい喧騒の地域から完璧な静寂の地へも行ける。静寂を破るものといっても、時折、氷塔（セラック）が倒壊する音とか、氷解のために砂礫層が出す滑音とか冬の小鳥の鳴声ていどだ。電車や国際特急の通る地域から、いまなお自然の支配する完全に太古のままの風景へと行ける。純白の広大な雪原、迫り出した青と黒の氷河、クレヴァスの入った巨大な氷舌。その舌端にはありとあらゆる破片が乗っている。それはその根元の本体からはるかに伸びて、凍りつくような一筋の水流を吐き出している。水はやがて川となり、その先に長い旅路が待ち受けている。行く先は海。

＊

移動生活をする　この気候条件はヒトが存在し始めたときから変わっていない。少なくとも、人間がここに住み出してからは。気候の変化は、おそろしく緩慢だから人間は気がつかない。この結果として、そして現在にもこの気候条件はその意味はあるのだが、ローヌ河畔の住人はなかば移動民族のままなのである。どういうことかと言うと、この辺の人々はここの自然条件に縛られ、また依存しているので、二重、三重の定住地を持つのである。

葡萄畑に一軒の家を持ち、もう一軒は教区内のやや高所に、もう三軒目はさらにもっと高所にである。これが〈夏の郷（マヤン）〉

である[3]。この三軒は、それぞれ個別の目的にしか役立たないが、人の方は全部に対応しなくてはならない。それで、人は一つまた一つと高度を変えて移動するのである。いつも移動途上にあるのだ。春には葡萄を刈り込みに下りてくる。収穫期には村に居住する。ここが定住地といえる。冬もここで過ごす。〈夏の郷（マヤン）〉には登って行って干し草作りをする。複数の季節に合わせての作業があるということは、それぞれの季節を有効に利用する手立てに工夫があるということでもある。

こうやって、自分たちの飲料、食料、家畜の餌を手に入れる方法を見つけだしてきた。ちょっと前までは、ヴァレー地方の農民は完全に自給自足で生活していたのである。

今でも、村はずれには山岳水路（ビッス）の流れで回る苔むした水車の小屋が残っている。ここで粉を挽いていたのだ。牛を殺しても、皮も大事にしていた。生きるのに必要なものは何か。住まい。これはあった。寒さに耐えるだけの衣服。これは、そう、羊毛があった。径（みち）は石ころだらけ。靴はすぐ擦りへった。しかし、家畜の皮がまさにあるのだから、靴職人に来てもらえばことは足りた。靴屋は、巧みにその場で仕事をしてくれた。

私は今、やや慎重に過去形で語ったが、それはこういう風習が少しずつ変わりつつあるからだ。しかし、この過去は、まだ、ほとんど現在にも通用している。老人たちはまだ、実に美しい褐色の粗い羊毛のざっくりとした服をまとっているし、それに、水車だっていくらかはまだ回っている。私自身も、度々、コトコトという音を子守歌代わりに聞いたものだ。羽根桶に少しずつ水が満ち、少しずつ傾いていく。その度に、仕掛けの内部のノッチの切り込みを一つこえる。これが、また極端なのろさで、ただし内部の歯車装置を総動員して力を何倍にもして作動するのである。小屋の扉の前には一人の女が待っていた。騾馬（らば）がそばにいる。来るときに二袋の小麦を乗せてきて、帰りには同じく

夏の郷（マヤン）＊

二袋の褐色の粉を乗せて行くのだ。ヴァレー地方の農民はこれで需要のすべてをまかなっていたのだ。今も、ほとんどの者はこれで十分である。

こうして、上へ、下への移動で生活してきたのだ。急坂の登り下り、その繰り返し、荷車、あるいは支流の谷筋の羊腸の小径。何時間もの歩行。アニヴィエールの谷の住民がシエールの町へ葡萄の世話をしにやって来るのはこれだ。この下り坂で一歩たりとも足を踏み外すことはゆるされない。絶壁の腹を長路歩む。その底には白く泡立つ奔流が待ち構える。隧洞（ポンティ）というのは岩の突出部に穿たれた小さなトンネルなのだが、こういう所も通る。天空には日がまだあるのに、昼なお暗き径（みち）を行く。千五百メートルから六百メートルへ下りる。集団で、村人が一体となって、笛と小太鼓を鳴らして進む。下山すると穫り入れを行い、また登る。騾馬の鞍の左右にぶら下げた革袋には搾った葡萄液が一杯だ。革袋でなければ平樽を同じようにしてぶら下げる。樽は騾馬の体型とぴったり合った形になっている。騾馬に乗るのは娘。娘は笑っている。娘でなければ子供連れの母親だ。

隧洞（ポンティ）＊

＊

小さな閉鎖宇宙　山に囲まれた小さな宇宙。小さく開いているのは川の流れ出る口で、まるで扉から出ていくように流れ出し、その扉も、流れが自ら、岩の堆積に穿ったものだ。

いずれにしても、この小宇宙は開かれている。交通に晒されている小宇宙ですらある。というのは、この郷土（さと）は北国と地中海諸国とを結ぶ街道に位置するからである。ドイツからイタリアへの街道だ。峠があって、その内のひとつは、その標高にもかかわらず、かなり太古から人の往来があった。標高二五〇〇メートルに近いグラン・サン・ベル

ナール峠だ。

そして、さらに、この郷土は東端から西端を貫いてローヌ河が流れている。このローヌ河も長い街道で、果ては海に至る。人は小舟で遡れるだけ上り、そこで舟を降り、流れを後にしてさらに進んだ。流れに何か惹かれるものがあったからだ。水源の謎だ。ありとあらゆる自然の障害を乗り越えて道を開削し、道が出来れば、通行に使われる。つねに、それも、さまざまなルートを記述した資料の残っている歴史時代以前から、いくつもの道筋が、ヨーロッパを縦横に行き来する商人に開鑿されていた。その街道から、海の物産が山へもたらされ、その逆ルートで、交易を経て、山の物産が海へともたらされた。織物、貝殻、琥珀（こはく）、そしてこれとの交換の品にチーズや革製品である。琥珀の道というのがあった。絹の道もあった。隊商があって、互いが遠く離れているにもかかわらず、こういう形で交流しあう国々をつなぐ厖大な交通量があったのだ。

ついでに言うと、このために、郷土芸能とか民間伝承の地域区分がじつに難しくなっているのだ。かくかくの形態は原型と思える、かくかくの装飾様式は、かくかくの建築方法は、かくかくの材木の集積方法とか伐採方法は、と、すべて、その土地で編み出されたもののように一見思われる。ところが、それとそっくりのものがきわめて遠隔地にもあるのである。しかも当初は、その様式の発祥の地だと思われていたところから実は遠く離れているのである。通常のレベルの発想だと、こんな技術は本当に人間的なだけに、起源がなんらかの不思議な理由で、きっと人類共通のものがあったにちがいないとみなされる。その共通という意味は、全ての人間に共通、つまりアダムとイヴの点までさかのぼって共通ということなのだ。アダムとイヴは全人類の父と母だ。例えば、レッチェンタール（レッチェン谷）の仮面である。レッチェ

レッチェンタールの仮面＊＊

ンタールというのは、ヴァレー地方の中でも、近づくのがたいへん困難な横谷（おうこく）の名前である。ここの仮面は木彫だが髭と髪の毛を植えてある。これがポリネシアやアフリカ製の仮面と極めて似通っているのである。とすると、（もし原型があるとすれば）その原型がアルプスの山襞の奥までやってきた、あるいは、むしろ、両方ともが原型で、その場合は、全人類が、肌の色がどうであれ、同一の起源に帰着するという問題もでてくる。

＊

外とのつながり　しかし、そんなに昔に遡らなくても、ここ何世紀かのあいだに物資のたどった道とか、流行とか信仰とかは、かんたんにルートが解明されている。さきほど峠のことを言ったが、その数はそう多いわけではない。その標高にもかかわらず、大昔から通行に使用されていたのは一つしかなかった。グラン・サン・ベルナール峠である。

＊

峠　ローヌ河の谷を遡って進むと、谷は右へ曲がり始める。そのあたりの右手に岐谷がある。その谷に取り掛かると、また枝に分岐していく。その一つを選んで遡る。進むにつれて厳しくなる爪先上がりを、万年雪の残る岩だらけの広大な殺風景な地点まで上る。七月のさなかでも、この山の頂上に鎮座する例の巡礼宿へ達するのに、雪の中のトンネルをくぐり抜けて来なければならないこともある。ここは名所だ。軍事的に名所で、宗教的にも名所だ。それは、かつて古代ローマ時代に、ユピテル神殿が建立されて、これは後に破壊されたのだが、間もなく修道院がそこに出現した。

峠の通行は実に危険だった。というか、危険に思われていた。安全祈願のためには、ローマの神々、あるいはキリスト教の神の加護に頼る必要を人々は感じて

グラン・サン・ベルナール峠＊

いたのである。修道院の脇にある池は、真夏でも凍っていることがある。池は、もちろんローマ軍団の通過も見ただろう。岩々が見下ろすなかを、百人隊兵軍の号令が響きわたったことだろう（こだまや、こだまのこだま。何度も響きわたり、無限に繰り返されていく反響）。後には、サヴォワ侯の廷臣が、シヨン城とかリパイユ城からトリノへ赴いた。石ころだらけの隘路を、隊商が小径いっぱいに通りかかる。騾馬（らば）の長い列。その内の二頭にはフェルト布で被われた桶が積んである。それには湯が満たしてある（不完全だとは言え一種の〈魔法瓶〉だ）。これのおかげで、峠の上でも湯浴みが可能だった。一見すれば分かるように、入浴など出来っこないそのぽっかり口を開けた深い谷底まで敢えて降りていかなくてすむというわけだ。さて、そのあとはナポレオンだ。大砲は、枝落としをした縦方向に半分に切り割った材木の上をすべらして行く。将兵たち、羽飾り、金色飾り、サーベル。それから道案内。土地の青年だ。貧しい。結婚もしたいのだろう。しかし出来なかった。それが急に出来るようになる。この労賃に、金貨一杯の銭袋を貰うからだ。

＊

ローヌ河　しかし、アルプスは峠だけではない。もういちど川のことを言う。海へと下る川のことだ。海は言うまでもなく地中海。この地中海はローマのものだけではない。エジプト、ギリシャ、パレスチナのものだ。偉大な文明が次々と継起し、帆に風を一杯はらませて、この広大な海へと広がって行った。海には障壁がない。それでも、文明はどこかで躓き、別のものにとって代わられ、その度に豊かになり、こうやって遂に、中東（オリエント）の一隅で、一つの独特な宗教が生まれた。それは、今までの文明の娘でもあったが、敵ともなった。良き敵であった。

＊

アカウヌムすなわちサン＝モーリス　こうやって、三世紀の終わりころから、アカウヌム（仏語名アゴーヌ）の町に修道院が設立された。この町は、谷がまさに一番細くなる地点で、その狭いところをローヌ河の流れが逆巻き水が

押し合いへし合い抜けて行くのである。

ここが、テーベ軍団とその団長サン＝モーリスの殉教があった場所である[4]。聖者（サン）モーリスは、ヴァレー地方の守護聖人となり、その後に、ここの修道院の名前もサン＝モーリスとなり、同時に、そこを中心とした小邑アカウヌムの名ともなった。

この町は、またサヴォワ風の町でもある。黒い御影石の玄関がある古い屋敷が、狭い路地のここかしこにある。河と山に厳しく挟まれて、川の左右に聳える巨大な峰々の影に沈んだ町。やっと修道院が、その建立地を、河と聳える岩山の間に定めたものの、峰々は絶えず、しかもすぐ真上からのしかかってくるのだった。

そういうわけで、聖者（サン）モーリスは、ヴァレー地方の守護聖人で、ヴァレー地方の人達の人名にもけっこうつけられているのだけれど、じつはヴァレー地方独自のものでもないし、聖者さんも土地の出身者ではない。どこから来られたかと言うと、地中海の果てから来られた。生まれは、さる巨大な河の岸辺。この河は砂漠の中を延々と広がって毎年、どこに堰き止められることもなく氾濫を繰り返していた。それで、砂漠を沃土に変え、どこまでも果てない青空のもと、太陽は、どう移動しても全てをお見通しの大砂漠の地平線から昇り、やっぱり砂漠に沈む。

聖者さんはエリート軍人で、戦役の偶然から、この山間の激流の岸辺へと移動させられなさった。この地は、人跡も稀で、太陽も一日に二、三時間ほどしか顔を出さない。お日様は、まるで小鳥が枝から枝へ渡るように、峰から別の峰へ渡っていくだけである。ここで、聖者さんは亡くなった。ただ、信仰のために亡くなったので聖人（サン）なのだ。それから、布教の人達が次々とやって来た。彼らもとても遠くからやって来た。隠者や修験者たちが共同体を形成して生活を始めた。かれらも、おそらくエジプト、あるいはシリア、ギリシャあたりからやって来たのだろう。生活共同体が、とにかくこの渓谷の地に形成されていく。これが今日に至っているのだ。西暦四世紀始めから二十世紀まで。千六百年間。一つの信仰の持続、永続。

この持続性とカトリック信仰は、いく世紀にもわたって蓄積された宝物の中に、今日なお見ることができる。参

拝客が頼めば、神父さんが親切に宝物箱から取り出してくれる[5]。たとえば、紀元一世紀の紅玉髄でできた盃である。神話世界が描かれ、宝石で飾られた足に載っている。メロヴィンガ王朝時代のものだ。聖遺物箱は金製で、古代の宝石がちりばめてある。ペルシャの水差し。打ち出し細工を施した銀製の聖カンディドゥス頭部像。これは十一世紀のもの。聖ベルナール・ド・マントンの銀製の手。多くの芸術作品が今日なお見られるが、それは代々伝わったもので、すでに消えてしまった文明と、そのあとに代わって現れた文明とのつながりを示してくれている。

聖カンディドゥス頭部像

＊

布教　伝道師たちがやってきた。聖書の言葉が語られた。こうやって、この小さく閉じ籠もった郷土（さと）も、普遍世界に参与はじめたのだ。こうやって、住民たちは、一方では、彼ら独自の世界を持っていたが、それは、この地独特の生活が、彼らをそうさせたもので、もちろん、厳しい必然性がそこにはあって、これに、彼らはいやがおうでも従わざるをえなかったのだ。もう一方では、信仰という面では、他の人々と同じで、同じ信仰を持つ地球上の全民族と同じなのだ。この信仰は習俗に影響を与え、ときには習俗を決めてしまうこともある。からだの動き、身振り、服装、文化一般に影響を与える。これは大きくて、ヴァレー地方の人々は、ある意味では独自の世界を持っているとは言え、それは、奇妙にも〝似通ったもの〟でもあるのである。

＊

普遍世界と固有文化　他の地方と同じ祭式が、同じ時間に終日教会で執り行われ、各地で同じ聖人が同じ日に祝われる。鐘が鳴らされ、その鐘はキリスト教世界ならどこにでもある鐘だ。ただ、鳴らし方がちがうだけだ。この地方

でも、鐘は信徒をミサに誘う。信徒をミサに誘うため、今日では、言ってみれば、東から西へと太陽の動く道筋の順に、鐘の乱打は次から次へとリレー式に全世界をつないで鳴っていくのだ。ただ、その鳴らし方が土地、土地で独特なだけだ。地元文化との混淆だ。この土地では組鐘（カリヨン）を用いる。鐘楼の上部に紐の仕掛けをつけて、その下端に環をつける。これが鐘撞きの立つ台の回りにぶら下がっている。

普通の言葉で喋っても、人それぞれの言い方があるし、その同じ言い方でも、人独自の訛りというものがある。鐘撞きは、この環を両手、両肘、両膝、両足首にはめ、八つの鐘とつながる。この八つの小さな鐘はちょうど彼の頭上にある。片手を下げる。もう一方の手を下げる。これで、二つの音が村の空にひっそりと流れていく。

日曜日だ。朝はアンジェラスの鐘だ。東が薔薇色になる。陽はまだ登っていない。無骨な粘板岩で被われた村の屋根の上は薄い青空。空と山の境目が薔薇色で、まるで山頂に花が咲いたみたいだ。地平線にそって間をあけて並べられた野薔薇の茂みにも似ている。鐘撞きは、膝を動かす。足首を下げる。また別の二つの音が響く。一拍おく。静寂。それから、本格的な歌が始まる。この間、男は大奮闘だ。両足、両腕を同時に動かす。片や、歌手たちもキリスト教世界共通の願いを自分なりのことばで歌い上げていく。これも混淆文化だ。教会ではラテン語で語られる。カトリック世界共通の言語だ。しかし、かれらは独特のラテン語を使うし、方言も使う。語末が硬い音になる南仏のオク語風にだ。その方言も谷ごとにちがったものだ。ここにも混淆文化がある。

ここの坊様たちは金か銀の縫いとりのあるミサ用のガウンを着るが、この様式は中東（オリエント）から来たもので、色鮮やかな上質の絹製だ。朱、白、紫なのだが、ところが地元の人達は、一張羅といっても、黒か褐色で、粗末な家庭製の布地の粗末なシャツを着込んでいる。で、この粗い布は、手触りも厚く、一度誂えれば一生ものという代物だ。だから、結婚式の日に身につけたこの同じ服を、死んだときにも着せてもらって柩に収められるのだ。

つまり、ここには、無意識の郷土性と「国際性」とが奇妙に同居しているのだ。郷土性といっても、小さなもので、大地や気候の必然性や民族の不思議からそうなったものという程度で、そう大層なものではない。だいいち、農民

の国際性などというものは存在しえないものなのだろうか。環境状況とか生活の条件が同じ場合、同じような文明が、文字通り、そのまま地球上の色々な地点で同じ形で再現しているというような。たとえば気温にかんして、等温地点ということを言う。同じ気温点同士では経度、緯度に関係なく、平均気温が同じなわけだ。この点は線でつなぐことができる。その線は、経度、緯度できちんと分けられていた地球を勝手な方向に切っていく。

同じような考え方を、平均的生活水準と生活習慣でしてみることはできないだろうか。例えばある点の一つがコーカサスにあり、別の点がスペインのどこかにあって、衣装とか、立居振舞、顔つき、建築方法、耕作方法など、外面的におどろくほど著しい類似があるという風に。そして、たぶん、こういう場合、対象をヨーロッパからチベットまで広げたってよい。少なくとも、私たちが見た映画を信ずるなら、ヴァレー地方の村や、とくにドイツ語圏の上ヴァレー地方とそっくりな村があるのである。白と黒でできた世界。石と材木。石灰を塗った石の基台、外壁は年代ものの黒こげ色のカラマツの丸太で出来ていて、小窓がつながって並んでいる。

＊

閉じているが開いてもいる　実に奇妙だ。ここはどこからも遠い世界だ。それでいて、あらゆるものに類縁性がある。すべてが閉じられている。ローヌ河を見下ろす峰のどこかに登ってみたまえ。河は見えるが、流れの出入口がはっきりしない。壁は四方をびっしりと取り囲んで屹立し、蟻の這い出る隙間も見えない。流れの源のあるはずの東側も、どこからかは流れ出しているのだろうが、結局、氷原の中でうやむやになって見えないし、一方、南北にあるはずのローヌ河へ入って来る支流の口もはっきり見えない。西側は、というと、これが、山塊が曲がっているために、一見、いくつもの山脈が重なり合っているようになっていて、やっぱり口が見えない。つまり、城塞の中にいるようなのだ。一切が閉じられていながら開かれている。昔もそうだったが、これから先は、ますます開かれていくだろう。人がそれほど苦労しなくても越えることのできる二、三の峠のおかげだ。人が遡れる河の流れのおかげだ。

そして人はたえず峠を越え、この流れを遡ってきた。そして人と共に、人の流れに寄り添うように、あれこれの新

しい思想、あれこれの様式、伝承、恐れ、集団の願い、精神世界のあれこれがやって来た。この地で受け入れられ、受け入れられると形が変わり、翻案され、独自性と普遍性とを融和させつつ、これらを受け入れてきたこの大地にそれらは似た姿になっていく。

＊

思想の伝播　現在では、思想は素早く伝播し、思想が及ぼす変容への可能性もまた同様だ。今日では、交通は地上、水上だけでなく、空もある。今日では、世界の情報を積んで私たちのもとにやってくるのは、もう隊商でもないし、荷鞍をつけた騾馬の長い列でもないし、けだるそうな川船でもない。情報は自由に動く。どこからでも襲って来る。その速さは、即時といってよい。移動する距離がいくら遠くても、発信されると同時に届く。オーストラリアのどこかであろうと、隣近所であろうと。光と同じ自由さとスピードだ。天空に聳える山など何程のものでもない。この四千メートル級の山々など何程のものでもない。この岩の高楼、巨大な櫛の歯、その間に沈む谷も、どうということはない。軽やかな電波、強力な電波、空全体がこの波の流れを助け、しかもそれは目に見えない。

＊

時代の変化　原始的な国家は、その特徴として、ある極端な状態から、急にもう一方の極端に移行する状況にいつでもあり、その中間点のような状態に止まれない。もっと進んだ民族なら、場合によっては、そういう中庸な点で止まることもあるのだが。進化と革命とは矛盾概念だということが分かる。

モロッコの遊牧民はラクダから突如、飛行機になる。私たちだと馬車、汽車、電車、自動車となるのだが。

彼らも飛行機には一瞬とまどう。しかし、私たちより簡単に受け入れる。私たちの方は生活習慣のあれこれがそれぞれの乗物と結びついてしまっているからだ。

技術上の発明などは、次から次へというわけにはいかないから、実用化もそう次々とはいかない。その実用化がそもそも、ときに長期にわたって、知らぬうちに、すでに時代後れになったものを固定化してしまうのである。

たとえば、もう電気が発明されているのに、町はガス燈で照明されているということがおこる。というのは、ガス照明は厖大な投資が必要で、財政上大きな利息支払いも予測される。つまり、ガス照明が続くほうがいいのだ。で、実際そうなる。ところが、どこかの山のどこかの山小屋では最新の電球が灯っている。というのは、あの油脂ランプから、ガスを経ないで直接電気になったからだ。

そもそも発明家が住んでいるのは大都会だ。発明はきびしく対立もするもので、たがいの邪魔ということもある。かつてのパリでは、輸送手段はじつに様々だった。それは各時代を代表するものが残って、それらが共存していたからだ。乗合馬車、市街馬車鉄道、市街蒸気鉄道、市街電車、そしてなんと言っていいのか知らない変な乗物、喘ぎながら前方の煙突から緑色の炎を立てて戦車の原型みたいな鎧のお化けがサン＝ミシェル通りを行き来していた。

思想の分野でも同じである。思想の発祥の地ではそれは、だんだん馴染みになって、ある道徳規範のなかで定式化される。つまり、慣習化してくるにしたがって徐々に採りいれられていく。じつに、習慣ほど破壊されるのを嫌うものはない。で、道徳規範というものは、警察とか軍事力の庇護の下で生き延びるのだ。習俗は親から子へと伝わっていく。要するに、こういうことというのは、これはもう人間の身体そのものなのだ、ここから、その国流の政治とか政党とか、その慣習とかいう、変化にたいするブレーキが生まれてくるのだ。こういう国に対して、もうすこし周縁の国では、流行の思想はかなり遅れて入ってくる。しかもほとんど抵抗力がない。新しいイデオロギーがそこに出現すると、段階的な防壁がないから、もろに、例えば、家父長制から共産主義的産業制へと移行してしまう。

＊

大産業とヴァレー地方　今は、大産業時代だ。これは、基本的には都市のものだから、山の真っただ中にあるヴァレー地方などは、この影響からは無縁であるはずだ。じっさい、石炭とか鉄のような資源がない。もちろん少しは鉱山もある。しかし、戦時体制ならべつだが、とても採算のとれる代物ではない。それに、どこの大都市からも離れてもいる。ただ、科学の発達で、石炭のようなエネルギー源が唯一のものというわけではないし、ヴァレー地方などは、

石炭以上のエネルギー源の元には事欠かない。液体が固体の代わりになったのである。

＊

水とダム　燃える代わりに落下するエネルギー、言うまでもなく水力で、これはヴァレー地方には厖大な潜在力があり、つまり氷や雪に姿をかえた水で、これなら夏の熱暑で溶けて、もとの状態に戻ってくれる。水とその潜在的な落差。技師たちがやって来て、山頂と平地の標高差を計測する。その差は大きいことが確認される。また一方、その高峰にある水資源はいうなれば無尽蔵だということも分かる。谿谷をダムで塞いで人造湖を造るやり方をやればよい。落差が大切なのだ。落差が大きければ大きいほど水量は少なくてすむ。もちろん落差は大きい。そこで、山の土手っ腹に巨大な管を通し、孤絶した氷河と、その斜面の麓に埋まった発電所とを直接結ぶ。タービンが中で回る。水圧で動くとエネルギーが生まれる。これを、必要に応じて、光または熱に変えていく。

技師と作業員チームは標高三千メートルの現場まで行き、そこで飯場生活をした。材料運搬用にロープウェーを作った。今まで、わずかの登山者か密猟者しか見かけなかったようなこの岩だらけの人けのない所、今までは、鳴き声を立てる栗鼠の一種、マーモットとか、素早い足の動きで落石をおこすカモシカぐらいしかいなかった所、そんな場所に、小規模ながら鉄工所とかコンクリートミキサーとかクレーンとかパワーショベルが設置された。鶴嘴や金槌の音があたり一帯にこだまを呼びさました。ここでも文化の対比と混淆がみられる。あるがままのものと、実用一本槍の科学の最先端。変わらないものとひたすら変わるもの。自然と人間の闘争、そして人間の勝利。というのは自然はなすがままになっているからだ。すくなくとも表面的には。自然は、工事人の腕と頭脳の熱のこもった働き

ヴァレー地方の山奥のダム＊＊

に逆らうことはしない。しかし、その大きさという無言の抵抗はある。これに対して、人間の役割というのは、自然の神秘に迫り、その仕組みを解明することだ。

ダムは高くなった。少しずつ、少しずつなのだが、着実に、一立方米また一立方米とコンクリートが積み重なっていく。幅数百メートル、高さ百メートル。その下には仕切り弁がある。ここから水は奔流となって導管を落ちる。落下することで水圧を生む。農作業にとっての難点だったこと、つまり、ひどい傾斜面が、発電に利点となっている。耕作のためにつくられた段々畑へ、発電所がやってきて、その段を取り払い、いわば落下が出来るだけスムースにいくようにした。水はやって来て、下り、高速度で落下する。タービンが回転する。今や、谷の奥では、到る所、巨大な白い煙があがっている所には工場がある。工場と言っても、他のは別として、電気を造る発電所だけは完全に無臭で無音だ。ところが、こっちにあるのはマグネシウム工場、あっちのはアルミニウム工場というぐあいで、蒸気が、時に、無風の日などには、山の斜面の中ほどに棚引いて、停滞している。風が吹くと、散っていくか、その形をたえず変えて広がっていく。

＊

その結果　これは、新しい形の侵略であり、新しい形の交通だ。というのは、交通は、思想や信仰にだけあるものではないからだ。こういう新しいやり方というのは、それと共に、新しい生き方をもたらす。農夫は、素朴な生活方法を奪われ、ボーナスの魅力に惹かれて、山羊と葡萄畑から立ち去り、広大な機械室に八時間拘束されることになる。こうして、二千年の時を一気に飛翔する。一日中、全く自在に山路を歩き回っていた農夫も、こうして身動きならぬ身となる。規則で命じられた時間を念頭においていなければならず、今やアルミナ（酸化アルミニウム）が高温の作用を受けている巨大なタンクの脇に立っている。今まで神様製の太陽のもとで、干し草フォークか剪定鋏を使っていたのが、それが今は、新しい太陽、つまり電気、つまり人間製の太陽のもとで、ミキサーの助けをかりて溶解点が千度を超している塊のようなものを回している。これ、赤すぐりの実のジャム風。ただし、すり潰すのに骨がおれ

る。で、出てくるのは燻銀色した鋳塊。

家畜小屋とか牧草地にいるときは一人だった。時々しか隣人には会わなかった。会えば少しお喋りもした。あとは、妻子のいる家に籠もっていた。それが今は、二千人の人間と一緒に働いている。一人一人は労働の一単位、労働力で測る量でしかない。一人一人の生産物は目に見えるわけではない。総計だけが問題にされる。葡萄の木の剪定の上手な者と下手な者との区別はすぐ分かったものだ。家畜の世話の上手な者と、家畜をいつも汚くして、病気にしてしまう者との区別もついたものだ。名前が無くなり、自分を表現することもなくなり、集団的にしか自分が表明できなくなってしまった。農民の考え方は消え、労働者の考えかたに変容してしまった。

また、農夫はさっきのようなダムに働きに行くということが起こる。人々は、ダムを新しい産業のためということで作り続けるのだ。ここで、いろんな所からやって来た労働者と接触することも起こる。そうすると、一日の仕事が終われば、労働者は散り散りに別れて帰宅するかというと、そうはならなくて、孤独さで過ごしたあとなので、流れ作業の仕事での義務的な仕事のあとは、一緒になりたいし、また自由なお喋りに花が咲くのである。

中には、今まで考えたこともないような世界観を披瀝する者がいる。俺はただの農夫だし、世界は神様から与えられたものだ。世界といっても今日一日というのでなく、あとにはあの世が続く。ただそれには善行が要る。あとは現世をきちんと生きる。諦めが肝心。物事を変えようなんて考えない。そう思っていたが、突然、目の前に、町からやって来た理屈屋のような男、お喋り会の弁士君ががいる。彼は、現世での命が全てだよ、ここをしっかり生きるほかない、と言う。彼は、世界は一つしかなく、それはこの世だけだ、ただ、この世は変わり得るし、変わるべきだ、そのために、ほら、機械があるだろう。機械力を使えと、機械のほうから諸君に呼び掛けているじゃないか、と言う。

＊

こんな話　これは、農夫がよく経験する根底的な転回だ。私は、ある人から、確かな話だと聞いたことがあるが、しかもこの話をしてくれたのは、極めて情報通の人なのだが、二、三年前、シオンの町の上方にある小さな山村の村

議会が、選挙の結果、共産党与党になりかけたというのだ。もちろん伝統的にずっと保守的だったところだ。この村には、冬は仕事が全くなくなる。それで、働ける男どもは、近くのダム工事現場へ出稼ぎにいったものだ。そこで意識改革を受けて帰ってきた。たしか、十八対二十だったと思う。もちろん反教会で、無神論で革命志向。それがどのていどのレベルだったのかはよく知らない。マルクス・レーニン主義なのか、レーニン・スターリン主義なのかは別として、いずれにしても極端だし、一時的なことだろうとは思う。しかし、極右から極左への地滑り現象を止める手立てがなかったようだとは言える。

＊

厳しい生活　山の中での生活は厳しい。ただ、山人は、比較の対象がないかぎり、これが厳しいとは別に思いはしない。老人は自分たちの家の外で何が起こっているか、よその人がどう生きているかなど、知りもしなかった。若者は知っているか、知っていると思っている。手に入るイメージをさらに膨らませて美化している。水道、ガス、浴室、定年退職。関係ないね。山の民の家は木製で、水は噴水泉へ汲みに行く。老年の安寧の確保のために、年取っても、頼りにできるのは自分たちだけ。でも年取ることなど心配でもなんでもない。子供だって親孝行とはかぎらない。子供に言わせれば、どうしようもないし、金もなく貧乏だということもある。それがどうやって父の面倒をみることが出来ようか。父は腰も曲がり、日がな、日向ぼっこをして過ごしている。お天道様の温かみを自分の血の温みに些かでも誘い入れるかのように。

＊

現金はない　私は、山の民のことをとくに考えてみる。そこには、じっさい金などほとんどなかった。今だって

村と教会＊＊

だ。何かの生産物を売らないかぎり、金などどこからもやって来ない。牛乳、チーズ、あるいは家畜を市に売りに行くか。しかし、考えてみれば、自分が必要とする量を超えるような生産がいるのだろうか。だとすれば、物々交換で充分だし、労力の提供を受けた場合は生産物の一部を渡せばよい。だから、粉挽屋には、挽いてもらっても金は払わないで、粉の一定割合をその労賃として渡す。金などほとんどないし、住まいは惨めなものだ。

山小屋だって、よそ者には〝絵のよう〟だろうが、中は、天井が低く、息が詰まりそうな部屋しかない。子沢山のことが多い。三、四人が一つの寝床で寝る。陽射しがとても少なく、冬には、暖房を節約するため窓を釘付けにするようなこともある。さらに、仕事は実に厳しく、畑のある地形も複雑で作業もままならない。そもそも真っ直ぐ立つためだけでも、身体から力を抜くわけにはいかない。教会の屋根よりも勾配のきつい牧草地で草刈りをする場合、かかとを地面に突き立て、片足はもう一方の足より高いところに置く。両足は、捩じれたように曲がる。猫の額のようなライ麦畑で半月鎌で刈り入れをするときもだ。物は、ほとんど人間の背中で運ばれる。

＊

細切れの農地　私たちはこういう山の中に放り出され、山で充足することを余儀無くさせられているのだ。もうこれ以上はできない、というぐらい、この山の地形にとことん手を加えてきた。しかし、それだけのことをしてもなお、山は私たちの骨折りなどどこ吹く風だ。人々に今一度言わせれば、「わたしら、いつも山径を登っているか下っているかで、葡萄畑から山の畑への道、またその帰り道で、これだけで半日ついやすことなどしょっちゅうのことだ

ヴァレー地方の村の風景

同　現在＊＊

よ、この半日というのは、まさに骨折り損のくたびれ儲け。その上に本来の野良仕事をしなきゃならないんだよ。足を使って、息切れして、それでいくらという労働だ。どういうことかと言うと、標高千二百メートルの村から六、七百メートルの葡萄畑へ、また村から、千五、六百メートルの〈夏の郷（マヤン）〉へと移動するんだ。これだって、農地が、これほどまでに切れ切れに細分化されていなけりゃ、どうということはないのだが、なにしろ、相続人全部が、自給自足出来るためには、おのおのが、家畜用の草地と、食糧用のライ麦畑と、飲物用の葡萄畑の三つが要るわけ。だから、土地が、ある場所単位とか、段々畑一筆とかでまとめて分与されていないので、相続の度に、際限なく分割されていくのだな。で、わたしらの葡萄畑は五、六枚に分かれていて、それが、ちょっとした部屋の広さほどもない。これがまた、二つの葡萄畑間を移動するのに一五分はかかるというしろものだ。これ、牧草地についても同じ。騾馬だって半分だよ。アルプス放牧の権利だって牛五、六頭ってこと」

じっさい、分かるように、この老人は、もういいかげんに休んでもいい歳なのに、いつまでもまだ移動を続けていて、「もっと続けたいのだが身体が言うことをきかないな」と言っている。もじゃもじゃの胡麻塩頭で、首筋まで深くかぶったフェルトの帽子の端から毛がのぞいている。不精髭、パイプ、薄青い目がこっちを向いている。

籠を背負って、騾馬を追うにしても、登り坂で、騾馬の尻尾につかまって引っ張ってもらっているにしても、もう精根付き果てている。家から葡萄畑まで、下りに一時間半以上かかり、登ってもどるのに二時間半から三時間はみておかねばならない。これだけで四時間はかかる。だから早起きだし、寝るのは遅い。

＊

夏の郷（マヤン）

水当番　旱魃というものもある。雨なしの炎熱の夏には、南に向いた斜面はとことん乾き切ってしまう。畑にも水がいる。二十四時間体制で〝水当番〟が割り当てられている。場合によっては、夜に当番が回ってくることもある。

ジョゼフィヌさんは母親との二人暮らし。兄弟二人はホテルで〝エレベーターボーイ〟をしていて、家を出ている。夜中一時から二時までの当番が回ってきた。水は氷河地帯からわざわざ引いたものだ。木製の水路を作って、大変な苦労をして引いてきた水だ。水路は、渓流の水面から二、三百メートルはある谷の絶壁に引っ掛けるようにして引かれている。谷底には、夜目にもはっきりと、水泡に白くなった岩床をぬって、奔流がその鱗状の背中を見せて流れて行くのが見える。

木製の水路を土地のことばで山岳懸樋（ビッス）という。この水は、そのあと、村の上にある松林の中を流れ、柔らかい地面に掘った池をなみなみと満杯にしてくれる。音もなく、それでいて、溢れ出して行く先へむかっての緊張が漲っている。ここから、排出口まで、水平に流れていく。排出の口は横にあいていて、水は流れ出て分流して行く。そして、さらに幹から枝分かれするように、次々と分かれ、果てし無く小枝にまでなっていく。高地の牧草地の溝などではもうちょろちょろとしか流れて来ない。溝を広げて水を誘導し、あとは埋め戻す。

水当番は名簿登録されている。この登録には監督官がいて、村で指名される公的な仕事なのだ。で、その夜、一時から二時までジョゼフィヌさんの当番が回ってきた。ジョゼフィヌさんは大柄の娘さんなのだが、いささか恐がりなのだ。どうしよう。当番をさぼるか。そんなことしたら牧草は枯れてしまう。とにかくお祈りをして、提灯に火を入れよう。鶴嘴を握りしめる。で、ジョゼフィヌさんは左肩に鶴嘴を担ぎ、右手に提灯を捧げる。灯はゆらゆら揺れながら、すわりのわるいお星様のように、

山岳懸樋（ビッス）

村の径を進んで行く。あとは独りぼっちに耐えねばならない。空には本物の星。新月も雲の間を、まるで先の尖った小舟のように航行している。おおきな白い雲がまるで彷徨える流氷のよう。新月の小舟がかなりの速度で航行していく。いつも、あの巨大な雲の氷山に危うくぶつかりそうになる。避けたあと、雲影に入って見えなくなる。はなれた地点で唐突に、虫をつつくニワトリの首のようにひょいと前へ出てくる。夜の明るさが目まぐるしく変化する。見えるかと思うと見えなくなる。明るいかと思うと暗闇だ。

ジョゼフィヌさんは石につまずく。ちゃんと道を見るには、もっと提灯を手の先に突き出さないと。夜の鳥が一声鳴いた。助けを呼んでいるみたいだ。道の脇の垣の根っこに足を取られる。漆黒の闇の中だ。わっ！幽霊の出る時間。成仏できずに、罰が解けるまでひたすらこの世を彷徨う亡霊たちだ。森の中で嫋々と泣いているのは、もしかして？ジョゼフィヌさんは思わず立ち止まる。もう心臓が早鐘のように鳴る。すると、月がまた顔を出した。一瞬だがほっとする。それからは、とにかく行かなくてはという義務感。

村の上へ出る。村の家々が見える。窪みに集まっているから、巣の中の卵みたいだ。一時を告げている。鐘楼の中で、時計が咳払いをした。嗄れた咳払いで御堂を震わしている。一度、二度と咳をしている。ジョゼフィヌさんは提灯を地面へおく。鶴嘴を握りしめる。やっぱり水路が乾いている。隣の人が不注意か、うっかりしていたか。今までの労役を無にしないためにも、もう一度山岳懸樋（ピッス）を組み立て直して、水の捌け口を作らなくては。きまりを無視するからよ。一五分以上の損失だ。それから、渇いた土が、思い切り水を吸うのを待ってから帰る。帰って床につくや、もう夜明け。起きなくてはならない。

＊

子沢山　女にも生活は厳しい。子供が多いのだ。長男がやっと十二歳で、末っ子が六カ月、その間にさらに八人いる。畑へ行くときは、一番下を抱くと、やっと歩きだした二人はスカートに掴まってついて来る。子供らに服を着せ、食事を与え、台所をし、家事をし、畑を耕さなくてはならない。やれ、干し草を引っ繰り返しに行かなくては、やれ、

噴水泉に水を汲みに行かなければ、やれ、買い物に行かなくては。しかも夜だって自分のものではない。たいてい、子供のだれかが病気でむずかる。あるいは呼んでいる。小さい四人と一緒の部屋で寝る。夫も同じ部屋だ。夫は鼾をかいてぐっすり寝込んでいる。夫だってその労働は寝床に入る瞬間まで続いていたからだ。一瞬の休息もない。一秒たりとも自分の時間などない。来る日も来る日も、死ぬ瞬間まで、毎日だ。

＊

病　その死も、病の手当ても無く、そのままということが多い。医者は高くつくからだ。医者は平地に住んでいる。もちろん医者は車を持ってはいる。しかし、とにかく、医者にとっても、道のりから言っても、往復を考えれば半日仕事になる。自動車道はある。しかし、道はうんざりするほど幾重にも折り曲がってくねくねと続くのである。騾馬だけが通れるような狭い峻道もあるが、村へ入るには、もちろん車から降りて行かねばならない。どうしようもない。死ぬのも困るし、まずは、ガソリン代も払わなくてはならない。こっちとしてはどうすればいいのだ。往診を待つ。とっつぁんはもういけないのか、一晩中ひどく泣いていたいちばんチビはいけないのか、診てもらう。内心は、「病気は、成るときは成るし、治るときは治る。たいていの病気は勝手に治るものだ。この二十フラン、あるいは三十フランは、どうやって工面しよう?」と考えている。やっと医者が来る。が、遅すぎる。もうべつにすることはない。先生はうなずく。水薬を調合し、注射を打つ。でも、その治療を信じているわけではない。でも、二十フランか三十フランは消える。

＊

変わらないもの　何もかも変わってきてはいる。しかし、ヴァレー地方の人々の今なお残しているものを見ることも必要だ。生活は困難だけれど、別に不平を言うわけではない。比較の対象がなければそんなものだ。もっと良い生活の幻影が彼らの目に写しだされる前は、また、そういうものに取り込まれる前は、色々な欲求の内の一つも充足す

れば満足していたし、もうそれ以上も求めなかった。第一、彼らは色々というほどには、たぶん知ってもいないだろう。知ることから、不満は新たに二倍にふくらむ。人間の欲には果てがない。

男は必要以上に飲み過ぎることもあろう。その辛い結果は目に見えている。女は年齢より早くに腰が曲がるという辛いこともあろう。

しかし、山には、どれだけ素晴らしい日曜日があることだろう。新鮮な空気のなかで、すべてが活き活きとし、自分たちも生き返る。疲労も難儀も心配も忘れてしまう。昨日までの苦しみもどこかへ行ってしまい、身も心も軽くなる。雲ひとつない青空のもとで、腰も軽く、すっと立ち上がれるようになるのだ。

きのうの夜、北風が吹いた。雲は南へ流され、玄関前をシャベルで雪掻きしたときの雪のように脇へ集められてしまった。雲は、はじめはばらばらにいっぱいあり、青空はちらっとしか見えなかったのが、今は、南方のアルプスの峰に寄せ集められ、そこで足止めを食らって、櫛の歯に掛かったようになっている。それから、雲は高く峰の上へと、まるで両手で持ち上げられたようにして押し上げられ、稜線あたりで押し合いへし合いをし、やがて越え、見えなくなる。頭の上には、もう二、三片のまん丸で軽い雲だけだ。春に降る大きな雪片に似ている。だんだん早く走りだし、澄明な空の中に自然に消えていく。

＊

慰安　日曜日　祭り　早暁、アルプスの頂上あたりだけがやっと薔薇色になりだす。お祭りに一番乗りで参加しようとしたかのように峰々はすでに花飾りでいっぱい。組鐘（カリヨン）が、細く尖った鐘楼からメロディーを奏ではじめる。溌剌と、明るく、軽やかに、楽しげに。家々では、みんな起き出す。自分たちも身が軽くなったのを不思議に思う。〈慰安（コンバンサシヨン）〉に行くのだから、みんな正装をする。男どもは、髭をさっぱりと剃って不精髭（顔に生えたむさ苦しい苔みたいなものだ）も消えた。若々しくなった。娘たちは、冷たい水で顔を洗い、両手で頬をはたく。薔薇色にするためだ。だれもが新品になる。だれもが着飾る。男は白いシャツ。女の子は、黒と青のビロードの縫い取りで飾られた

お祭り用の帽子をかぶる。銀色の光沢のアルパカ製の美しい腰丈のブラウスや、胸の位置で合わせて背中側を三角形にした絹の肩掛け。彩り鮮やかな模様と房がついている。

〈慰安〉の集まりの楽しみと、揃って何かをする楽しみがここにはある。かつては仕事にも一体感があった。現在は、日曜の朝、打揃って外出する楽しみの方に一体感がある。

陽の光が玄関前に影をつくり、そこが、また入口のようになっていて、ひんやりした、それでいて刺すような空気には、山の匂いがする。また、組鐘（カリヨン）が鳴り出した。それから大鐘も。するとみんなは、一点を目指して歩き出す。男も女も子供も。病人とか赤ん坊だけが家に残る。みんなうち揃って、同じところ、教会へと赴く。むきだしの石そのものような教会。村人が建てたものだ。聳えるように建て、辺りを見渡している。脇にある家々の屋根は地にはいつくばり、はりついている。今でもみんなは揃ってミサに出る。これもまた〈慰安〉なのだ。今日でも、山の村ではみんな同じ信仰だ。祭壇から与えられる神の約束の言葉は村人に喜びをもたらす。お香のよい匂いがする。鐘がなると聖体奉献が始まる。みんなひざまずく。聖体奉献の鈴の音が広場まで響いて聞こえてくる。広場のすぐ横は墓地。死者にも聞こえるようになのか。死者も喜びに与かって、今一度罪の贖いをするわけだ。村人の内で、二、三人が、万が一不参だとしても、教会の扉は開かれている。その者は扉の前でじっとしている。時が来ると、近づいてきて、とにかく帽子だけはとっているのが見える。

日曜日。山路には、青年たちの群れがいる。女の子たちは手をつないでいる。

植え込みに沿った小径で、青年たちは立ち止まり、口に手をあてがって大声で呼ぶ。

百花繚乱の季節。山の花は、白い花はあくまで白く、黄色い花はあくまで黄色い。リンドウの花は紺碧の染料のよ

祝日の慰安の集り＊＊

うだ。

クロッカスは、白と薄紫か濃紫か金色の葉脈があって、湿地に育つ。溶け初めの残雪の脇に咲いたりすることもある。溶けた雪が凍ったりする場所でもだ。薄い雪片が消えぎわに露となって滴り落ちる。

群生している薬用サクラソウは、ままごと遊びのお皿を並べたみたいに、牧草地に咲いている。蕾が今にもはじけそうなリンゴの木の周りに咲いている。アネモネも咲いている。その花の下、茎にそって、蜜蜂に生えているような和毛（にこげ）の金毛というか銀毛が、指でふれると柔らかい。

下の方で、羊飼いたちの中で小太鼓の音がする。どこからか、ラッパの練習の音もする。女や子供たちは萌え出した草の上に座っている。いく千というかわいい新芽が急に顔を出す。まるで、乾燥した藁くずの中に見える麦の穂のようだ。まだ冬の名残のあった色の褪せた茂みも、今、一つまた一つと消えていく。

＊

行列　村人は祭りの行進もする。聖体の大祝日。これは大祭だ。その他にも祭りはある。それは、今なお本物の祭りだ。どういうことかと言うと、みんなで楽しめる時間だということだ。つまり、皆はまだ共同体の中で生きているということだ（厳しい生活をねぎらう慰労（コンパンサション）の催しなのだ）。

村の通りに沿って、アカシアの枝を植える。近くの森から切ってきたものだ。今、満開なのだ。村の通りが緑と白になる。花の飾りで見違えるようだ。両側の花の垣根の中を行列が通る。いい風景だ。村人みんなが参加している。

ラッパ。兵士。武器とヘルメットを身につけた現役の兵隊。徴兵からもどっても装備は家庭においてあるからだ[6]。時代ものの

衛兵の行進＊＊

制服の者もいる。傭兵時代のだ。ナポリのとかフランスのとかローマのだ。赤い羽飾りのついた円錐形軍帽、大きな肩章、胸飾り付きの詰襟、胸のところで交叉している白革の肩帯、ぴちっとした半ズボン、長靴、ゲートル。こういう、遠くからでも見えるように配慮されたはでな色合いの後には、目立たないように配慮されたくすんで沈んだ色の現役軍が続く。その次は、司祭さんと天蓋が来る。両手にキリスト像を捧げている。次は、ベールをつけた娘たちの聖体行列。

＊

一体感　みんな参加する。歩けるものはみんなだ。杖でかろうじて立っていられるような腰が二つに折れた老人も、松葉杖のけが人も、生まれたばかりの赤子が入れられた桃色の毛糸編みの袋をしっかり抱いた女も、みんな。ここにはまだ揃って何かをするという伝統があるからだ。

＊

山の民と自然　山の民は自然に挑むが、それと同時に、自然にうち負かされもするし、また自然に助けられもする。自然は人間など眼中にない。人間は、自然のある一部には力を及ぼしうる。しかし、たいていは、手に負えない。自然に任せる。少なくとも当面はしかたがない。雨を自由に降らせることができない限り、困った雲を取り除けない限り、遅霜を避けられない限り、星の運行を縮めたり延ばしたりできない限りはしかたがない。星などは、空にあって、現在のところは、手のとどかない場所にあるし、だから、人はなされるがまま、せめて祈願でもするか、少なくとも、自然の創造主に祈願するか。

そうしても、主は沈黙したまま天におられ、旱魃のときには、どれだけ灌漑をしても、牧草を枯らし、水不足が麦

祭りの行列

に到れば、麦を成育不良にされる。自然。それにたいしては、人は無力である。ただ、その一部分は、人によって手懐けられ、従順にはなっている。さらに支配を強めようと人はいくども試みてもきた。一方で、人は自然の恵みを待つという生き方もしてきた。種を蒔き、待つ。種を蒔くというのは、たいへんな仕事である。

しかし、もっと大いなる仕事がある。それは、種蒔きの後に、地面の下でおこっていることだ。私たちには窺い知れない作用が、その豆粒みたいな種の部分部分に生じていて、しかも、そこに私たちの未来が宿っているのだ。種がふくらみ、破れ、地上にたまたま小さな青い芽を出し、それは、まだほんとうに恐る恐るという風で、その内だんだん勇ましく、場合によっては、だんだん自信を失う。その違いは、今までの手助けのあるなしによる。あとは、農民は心配そうに待つほかない。ひたすら待つ。待つことも大変だが、どうしようもない状況での心配はもっと難儀だ。道具も機械も金の蓄えもなんにもない。創意工夫など意味がない。自然にたいしてできることなど知れている。ちょっとやそっとでは、自然は応えない。とりわけ、こういう荒れ地の残るところ、二千メートルを超える所の自然には、人間のわざなど通じない。

たえず、雪崩や、氷河のたもとの地下水溜まりの決壊や、岩山の巨大な山崩れが起こる。それでも、少しずつ、人は、部分的にだが、自然を馴らしてきた。動物の家畜化がそうだった。そこから生活資源を得る。山羊、牛、羊。ただ、カモシカだけはまだ今だって、人けのない岩山を自由に走り回っている。これは、撃ち殺すほかには資源にしようがない。

＊

営々と築く　人間がアルプスへやって来た。わずかの数がやって来た。まだ手つかずだった大自然の中で、ちらほらと何家族かがやってきた。

枯れ木の上へ、立ち枯れた樹木がまた重なり、水は川床から砂や岩片などをかっ浚って、一切合財を流していた。天空には雷鳴、稲妻が満ち溢れ、雪崩を引き起こし、雪崩は制御もきかず、斜面に沿って勝手気ままに滑り落ち、樹

林をなぎ倒し、その跡に長大な険狭谷（ルンゼ）を残していた。花咲く木々を根こそぎにし、地肌を剥き出しにし、それを雨が、さらに浚い、地面が浚われると、岩が剥き出しになっていた。

人間がやって来て、土を背負って運び、それを積み上げ、土留めで囲って固定する。だれかが、少しずつ、何世代にもわたる不屈の作業で、はじめはざっと手を着ける程度だったのが、先人の残したこの仕事の続きに取り掛かり、少しは増やし、さらに、先祖の残したものをもっと増やしていく。高山では氷塔（セラク）があたりに響きわたる音を立てて崩れ、それは鉄砲の音というか、鎖を引きちぎったような音だ。渓流は突如として洪水となり、猪の牙のように深く土を抉って行く。大荒れの自然の中で、ひたすら小さく、成す術も知らぬ、少数の（やがてやや増える）人間はわずかの林間の空地（くうち）をみつけ、そこを開墾し、住まいとする。木の枝の小屋に雨露をしのぐていどだった。しかし、時間と手を組み、粘り強さを味方につけることをおぼえた。空地をつなぎ、森林を切り開き、日当たりを良くして土質を修復し、耕し、種を蒔いた。こうやって、徐々に高地へと開拓をすすめ、そこに定住し、人口を増やしていった。木の家を建て、土台だけは石にして、しっかり岩の上に乗せた。葡萄の栽培も、畑と同じような手立てで、地滑りの発生を防いで可能になり、それからは一定の場所に恒常的に出来るようになった。これは今と同じである。

違った標高、違った谷筋に滞在し、一家族ごと孤立していたのが、集まり、村をつくり、それが族となる。村は教区となり、族は永い間敵対していたのが、いつか一つの民となる。

谷川は、もう以前から害を与えるものではなくなり、川、と行っても、ローヌ河だが、これも、両アルプスからの水を集め、氷河を育ての親とし、当初は両アルプス間の谷を、氾濫しつついっぱいになって流れていたのが、今や水路は整備されている。その両岸から川中へ向かって岩で出来たいくつもの突堤がある。これで奔流をころす。馬を、轡（くつわ）をちょっと引いて押し止めるのと同じだ。堤は全域にわたって造られている。左岸、右岸への氾濫をさけるためだが、ローヌ河は気まぐれで、好きなように流れるから真っ直ぐに導くのである。道路みたいになっている。

昨今では、山の上から鉄道線路が見える。これは、念入りに石組みをし、セメントで固めた国際幹線である。そ

れに比べると、河筋は、アスファルトで固められたあんまりぱっとしないほぼ真っ直ぐの道といえる。増水が引くときに残された淀んだ水溜まりには、葦が生えているだけだ。丘の上に避難したようなサイヨン村の城壁の下あたりがそうだが、他の村は、あえて川岸近くには作られなかった。月明かりのあかるい夜などに、蛙の単調で淋しい大合唱が聞こえてくるあたりには、今は、アンズを植えていているし、苺を植えているし、アスパラガスも盛んに栽培している。大果樹園を造ったりもしている。そして、夕方になると、河川敷を滑走路にして、飛行機で集荷しにやって来たことがある。今もやって来るようだ。これを都市の朝市で販売するのである。赤い点が次々と並んでいるのが見える。それが、機敏に動いていくのである。娘たちが頭に巻いているスカーフだ。俯いて実を摘んでいるのだ。道路にはトラックが見える。箱を四トン、五トンと積んでいる。毎日、大地の恵みをいささか取り上げに来るわけだ。

大地といっても川砂の堆積層だ。土砂を運んで堆積層を作り上げた河から、人間が奪い取ったとでもいうか。河は、人間の文化のただ中にあって、今や、このような人工の高い土手に挟まれて、ローヌ河は、やや囚われ人風で、事態がよく飲み込めていないみたいだ。やっと遊びを知った子供、その子供がやがて厳しい規律に縛られていく姿とどこか似ている。遊びを取り上げられただけでなく、おとなしく働くことを義務付けられたのだ。奔流も同じで、タービンの中を少しでも遠くへ突き落とされ、本来の力を少し殺がれる。水面に漂う静穏さで、その潜在力は分かるが、力というのは、なるだけ水平での待機時間を長く保つことで、水の落ちる勢いをより効果的に利用できるのである。

＊

サイヨン村の塔＊

ローヌ河　若く自由な川の姿はなんと美しいことだろう。しかし、今、その自由な姿を見るには上流へ行かねばならない、シエールの町より上へ行かないと、以前ならどこでも見られたあの河にめぐり逢えない（それもいつまで見られるものか?）。そのあたりだと、ローヌ河は、まだ山の渓流でしかない。夏が高い峰々あたりにまで到達する頃、その麓でローヌ河は生まれる。これを見てほしい。　平地の河川は冬と春にいちばん増水する（セーヌ河の氾濫は二月に起こる）。ローヌ河は、冬はほとんど川床が見えるていどに渇水する。半分は凍ったちょろちょろ水である。ローヌ河は、雨のない季節に氾濫するのである。真夏、大乾期に、この地方いたる所で、天に恵みを乞うお祭り行列が行われている季節に、つまり草が枯れ、南に面を晒した大斜面が赤茶けた色になり、果ては紫色に、そして、岩までが陽射しの影響で、人の皮膚のように日焼けして色が変わるという、その季節に氾濫するのである。実はローヌ河の恵みは炎天なのである。大量に保存されている氷。炎天下、固体としてかたまっていたものが液体に変わり、氷塔（セラク）は倒壊し、クレヴァスは口を広げ、山の肩に乗っていた雪原は徐々に縮小していく。洗濯物が乾くと、気のきく主婦なら、それを取り入れるとき下から一つずつはずしていくが、これと似ている。

　ローヌ河には干満がある。午後に向かって水嵩は増え、奔流、激流となる。夕刻には静まる。源流にほど遠くない地点では、大きな谷を今なお自由な姿で流れて行く。谷といっても、かつて、自らが開削し、両岸間をその流れで満たし、ふざけているかのように、たえずどこかへ行ってしまい、形を何度も変え、野に放たれた子馬のようにあちこち暴れ回る。平野の川は平穏で流れもない。平野の川は濁って汚い。ローヌ河はきれいな水を運んでいるが、色はミルク色。それは、懸濁状態の砂を含んでいるからだ。流れの過程でかっ浚って持ってきた花崗岩の粒である。山はこうやって擦り減り、少しずつ姿が消えていく。いつかは全て海へ運び去られる。増水の時に川が大量に運んでいるのは、実は山なのだ。

　正午が近づき、増水を始めると、川の色も変わり、河川敷のジャガイモ畑を打ち倒し、その上の岸から溢れ出るのが見える。そして夜の間に水は退く。

シエールの町の橋の上から、東の方、つまり上流方向を振り向くと、真夏なのに冷たい風が顔にあたる。汗で髪の毛が額にはりついている。帽子を取って流れに向かって敬意を表されたい。ギリシャの詩人ヘシオドスも、そうするよう述べている[7]。そうすると、やさしいそよぎに包まれる。この冷たい風はローヌ河なのだ。この力強い風の流れは、河の伴走者ともいうべきもので、忠実に河と一緒に流れているのだ。髪の毛も風になびき、しかも、この河、平地まで氷河の霊気（エマナチオ）を運んでくれる。そうなるとローヌ河に一礼をしたくなる。

この風は、断崖にしがみついている木を撓め、どれをも一定の方向に向かせ、身動きできない状態にし、これから立ち直る木はない。風は橋の上を流れ、その音は水の音と混じる。

ローヌ河の誕生。大いなる命の始まり。川面に波を重ね、波を押し出して流れ行く。海岸に潮の押し寄せるのに似ている。まるで、その誕生から、行く末の海を予感しているかのようだ。

岸辺の上には、巨大な岩壁がそそり立っている。奇妙な形に切り出され、山から落ちて来たような岩だ。もっとも、そのあと時間をかけて鑿（のみ）のようなもので整形された風にみえる。そういう中には、柱廊（ポルチコ）のように内部が穿たれているのがある。それが川岸とアーチでつながっている。こうして出来た空間に、水流はすさまじい音をたてて激しく呑み込まれて行く。水面が盛り上がる。さらに上流の、砂で埋まった谷底では渓流が、春になって穴から這い出した蛇のように、とぐろを解き、右、左に伸び動き、身を捩り、また伸び、始めての川床を離れ、次の川床を作り、また離れて行く。自然の力がまだ自由に働いていた大昔の貴重な痕跡だ。

その後、人間がやって来て、下流が支配され、河の流れは人間のつくる溝に閉じ込められ、堰でもって動きを制御されていく。軛をつけられた牛だ。人間の力の使い方は特殊だ。

＊

シオンの町の市　今や、ひとつのまとまった民となっている十五万[8]。これだけの人がこの山で共に暮らしている。自治が形成され、とにかく、山の民とは言え、ここに集まるあらゆる種の思想、発意にさらされている。昔ながら

の習慣が、予想もしていなかった新しい技術の導入とごっちゃにならないで共存しているという奇妙な混交体である。何百年が、隣接した状態で共存しているのである。

いまでも、おそらくローマ時代から変わることない荷鞍をつけた騾馬をつれて、山を行くのである。そしてそのすぐ脇には、国際特急列車が、鉄路の法面に散ったポプラの落葉を巻き上げ、ニッケルの光沢を輝かせ疾駆して行く。山の住人はまだ革袋や〈ボティユ〉を持っている。ボティユというのは、偏平の小さな樽で、ナイフで切り出したカラマツの板を樽の側板にして、これを帯状にして接合して、おなじカラマツの箍（たが）で結わえ合わせたものである。彼ら独特のコップもある。これはガラス製ではなく、スズカケの木を轆轤（ろくろ）で削り出したものである。石灰をつなぎにした石の基礎の上に造られた丸太製の古びた家のすぐ側に、ガラス張りの平屋の大きな工場があり、最新の技術に合わせていつも改良されている機械で、袋から出てきた白い粉のようなものから飛行機の部品を作っている。

山の民はそれでも生活を変えない。彼らが打揃って秋のお祭で山を下り、ヴァレー地方の州都へ出かけるときをよく見るがよい。全山からやって来て、一日集い、互いに交歓する。これは旅みたいなものだ。いや、旅以上のものだ。長い道のりの者が多い。なにしろ谷の奥から、ローヌ河畔の平地のまばゆい地、シオンの町までやって来るのだから。

シオンの町、この平地の町には岩山が二つにょっきり立っている。二つの鋭い頂上。懸崖というか高山の頂上を思わせる。ただ、高山なら雪を戴いているが、ここは赤茶けて褐色で、岩盤と岩棚の間に枯れ草の踊り場がある。一つの岩丘の上には半分廃墟になった古い教会があり、もう一つのには崩れた城塞跡がある。みんなが町へ来るのは、馬に牽かせた荷車か騾馬か徒歩（お爺さん、

シオンの岩山。右がヴァレールの丘。
左がトゥルビヨンの丘

お婆さんは傘を持って来た）でだ。列車というのはわずかだ。山羊を追う者、綱で豚を引っ張る者、棒で景気付けしながら牛を追う者。男たちは負籠を背に、女たちは手に手に大きな籠を、男の子たちは、膝のあたりが膨らんだひどく長い半ズボンを、娘たちは母親と同じプリーツのはいった足首まであるスカートをはき、同じ帽子をかぶって、母親そっくり。みんな一緒に、みんな同じ地点に向かうから、みんな似て見える。

*

老人　ある者はドイツ語（中世前期のドイツ語の一種）を喋り、他の者はオク語の方言を喋る。しかし、どこの出身であろうと、ローヌ河左岸の山奥の出身であろうと、麓に葡萄畑がある右岸の高地出身であろうと、みんな共通の性格をもっている。それは、同じ気候、同じ土質、同じ食い物、同じ仕事、同じ信仰、同じ必然性から出てきたものなのだ。男はどちらかというと小柄で骨太で、ある年齢に達すると変な髭をぼうぼうにのばす。その髭から、小さな穴付きの銅の蓋がついた、管の曲がったパイプがのぞいている。背中に瘤があったり、足を引きずったり、身体が曲がっていたりする者もいて、羊毛から作った厚手の生地の黒または褐色の服を着て、靴は頑丈で、石にも見紛う分厚い革だ（いや、それこそは彼らの皮膚だ）。踵には鋲が打ってある。歩くのに大変だろうと思う。とくにああいう老人には。ただ、石ころが靴の下にごろごろしている階段ほどの急な山路にいったん出れば、ゆっくりした足取りだが、この靴で持ちこたえるのだ、それも何時間でも衝撃に耐えるのだ。

*

男の子　若者は色もののネクタイをして、帽子をあみだにかぶり、喧嘩早いし、動きもハデだ。彼らは、多く、遠くからやって来ている。というのは、彼らは、世界中の外国ホテルにボーイとして遣られているか、スイスのホテル勤めをしているからだ。時に、生意気で、世間の風を経験しているのだが、いったん村に帰って、もういちど村の流儀に染まれば、また父親に似てくるのにはそう何年も、いや何ヵ月もかからないという感じはする。

*

女の子　女の子の方はというと、彼女らは美しい衣裳をつけている。形や色は村ごとに違っていて、これは帽子もおなじだ。一部の者は金髪で丸顔だが、大方は髪は黒く、皮膚も浅黒く、スペイン人風の長顔で、目の色も油を塗りこんだように濃く、これが彼女たちのむらっ気を表している。こういう話がある。その昔、サラセン人がここへ侵略して来たが、退却の際に、彼らはとくに鄙遠の山奥に、幾許（いくばく）かの子孫を残して行ったという。これが、孤絶した環境のおかげで、純粋な形で今日に至っているという。つまり、こういう娘たちはアラブ人の子孫かもしれない。ただ、似たような生活条件と気候のせいで、同じような顔つきが形成され、同じような性格が与えられるようなことがあり得るとすれば、人種のことは関係ないかもしれない。それに、人種というが、それが存在するとしても、数多い混血を繰り返してきて、このことは、いかに鄙遠の山奥であっても免れない。

今までも、この郷土（さと）にはゲルマン的な影響はあった。ベルン・アルプスはいくつかの峠で越えられるわけだから、その北側ではドイツ語の一つであるベルン方言を喋り、この人種の形質（肌の色、体つきなど）は際立ってここのと異なっていることが多い。しかし、町の中を、こういう女性が、忙しそうに、二、三人かたまって往来している姿を見てみよ。ぴんと立った婦人帽（コワフ）をかぶり、あるいは卵形にふくらませたリボンをくるっと回した帽子をかぶり、またある者は、かんかん帽を頭の横に気取ってかぶったりしている。色もののネッカチーフ、腰まで覆う丈長のいかにも貞淑そうなブラウス、プリーツの入ったスカート。それぞれ違ってはいるが、それでいて、なんともいえず似ている。理由は、そこにある同じ生活、同じ必然性だ。

女性も、男と同じく、喧嘩は買ってでるというタイプで、ただし口喧嘩だが、切返しも素早く、言い合いになって止めを刺すせりふを心得ている。これが十八か二十歳。その内、結婚し、悩みがあったり、子供が生まれたりする。すっかり変わってしまう。歳より早く老け、腰も曲がり、情けない姿になる。まだ歳ともいえないこの女たちが店の前で、亭主の帰りを何時間も待っている姿がみられる。呑み始めて帰って来ないのだ。祭りを口実に呑んでいるらしい。

秋。十月の末。葡萄の収穫もすんで、地下蔵の採光窓からは芳醇な香りが漂い出ている。これを嗅ぐだけで酔う。

灰色の荒れ模様の空。まだ暑い。風が吹く。雨を告げている。フェーンというアルプスから吹き下ろす乾燥した高温の風だ。平野部に砂嵐の高い柱を起こし、大気の中で渦巻くのが見える。沈んだかと思うとまた巻き上がる。すると、競市に連れてこられた家畜を集める広場の回りに建てられた仮店舗のテント屋根がバタバタと鳴る。この店ではなんでも売っている。ありとあらゆる布地、靴、髭剃り。ある店では、地元の物産、例の〈ボティユ〉、木製の盃。また、紐、靴墨、ナイフ、手鏡、首飾り、ブローチ。娘たちが立ち止まる。欲しくてしょうがない。テント店の男は呼び込みをしながら女の子たちを笑わす。なのに娘たちはぷいと行ってしまう。男が品を差し出したからだ。二、三人、友達同士なのか従姉妹同士なのか腕を組んで歩いている。一種の護身なのだ。一人じゃないの、一緒にいるの、という印だ。誘いを防ぐためだ。

＊

家畜たち　男たちは、広く四角い広場に牛を連れて来ている。エランの谷の茶色の小型の品種で、牛までが、この地方では闘争的な気質をしていて、アルプスの牧場で闘牛をさせる。そして勝ち残ったものを女王（レーヌ）と呼ぶ。雌牛だからだ。

べつの広場には、女たちが山羊、豚、羊を連れてきている。二つの広場を結ぶ通りはどこも人と露店でいっぱいだ。二、三段下がったところの、街路あたりでは、革鞣屋（かわなめしや）のような店がある。そこでは毛がついたままの山羊の革を売っていて、激しい臭いがする。

アルプスの闘牛

シオンの市

＊

酒　カフェは賑わいを見せていて、時間の過ぎるのも早い。それは、ヴァレー地方は美酒の郷土（さと）だからだ。自家醸造酒があるのだが、ともあれ、仲間と悦しんで呑みたい。とすると市の立つ町しかいい場所は思いつかない。市には売り手でなくても買い手で来ればよい。地酒があり、しかもヴァレー地方は由緒ある酒どころだ。古い風習が保たれ、葡萄酒だって「画一化」などされていないし「量産」などしない。自分たち独自の製造方式が、しかもいろいろな方式がある。その種類は、ファンダン、レーズ、ミュスカ、アミーニュ、マルヴォアジ、ドールなどだ。いずれ、よそから伝わって来たものなのだろうが、ここの土地ならではの味わいを出している。それは、ここに例の段々畑の葡萄畑があるからである。取り木をしていく度に、段の品種がころっと変わってしまい、すぐ隣の段の品種とはまった違ってきてこれを毎年変更を繰り返し、そのため葡萄の株が新種になってしまう。段々になった葡萄畑の中に、何千という小さな葡萄の品種の区分けがあり、黒い実、白い実の段階で、この一本一本が最大努力をしてお日様の方へ顔を向けてくれる。すると、これが少女の肌のように黄金色になっていく。そしてぷちぷちにふくらんだ時にはついに褐色となる。この実から、種々の地酒、素朴な葡萄酒の数々が生まれてくるのである。生きのいい色と香り。これは仲間と呑むに限る。とくに、一握りのコインを持っているとき、あるいは財布にいく枚かの丁寧に折りたたんだお札を持っているときは。彼らの姿にも似た葡萄酒。多様性の中にも統一性を持つ葡萄酒。

＊

喧嘩　葡萄の収穫も終わった。今年も終わりだ。農民や葡萄栽培者の一年はこんなもの。休戦。ページは一枚めくられ、打揃って、懐には一度きりのいささかの金。夕方にかけて、声も騒がしくなる。カフェの扉が開くたびに街の喧騒がまざってくる。テーブルを拳で叩く者がいる。皆の笑い声で話声もかき消される。話は、しばしば言い合いに、言い合いは喧嘩に、喧嘩は殴り合いに。閥もあるし、党派だってあるし、家同士の反目もあるし、利害の対立もある。秋の大風が吹けば、気も立つ。新酒の香りが樽から立ちのぼり、地下倉の小窓から流れ出て、足元から鼻へと到

れば、それだけで酔っぱらう。マロニエの葉は革のように硬く、大通りのアスファルトを引っ掻いていく。日はすぐ暮れ、夜はたちまち到来する。ご帰還だ。街には人けがなくなる。骨の折れる帰宅。なにしろ、漆黒の闇の中を何時間も難路を帰るのだから。ごろごろする石ころだらけの径、しかも一直線の登攀道か、そうでなければ、幾重にも折り曲がったジグザグ道を行き、山間のはざまに、やっと道のつながりを見つけて進む。山道はいかにも細い…。そうして、また日毎の生活が始まる。

＊

山へ上がる　よければ、グランジュ村で下車してみよう。シオン町とシエール町の間の鉄道駅である。小さな駅舎は岩の斜面に寄り添うようにしてあり、線路はその岩に乗りかかったかと思うとすぐに折り重なった岩塊の間に消えている。

ローヌ河は、ここでは、間近の堤防に包み込まれるようにして、ちょっと見えない。前へ身を乗り出しても、ほとんど音が聞こえないほど、そそり立つ長堤に挟まれて流れている。増水して水面がこの辺りで超過するようなことが万一あったとしても、まず決壊するようなことはない。水は防備の行き届いた堤防の壁面に触れる程度で、バイオリンの弦のように軽い振動と共に流れていく。まったく音が聞こえない。列車は出て行った。やがて岸の突出部の向こうに見えなくなり、音も消えていく。午後二時。夏。暑い。今、こっち側はまともに南に晒されている。

＊

葡萄畑　バッタがいっぱいいる。緑のや青いのや赤いのだ。緑のトカゲもいる。

近くの葡萄畑へ行くとさらさら水の流れる音がする。葡萄にも水をやっているからだ。どこから来ている水かというと、頭をのけ反らすようにして見上げると目に入る、青空を背景にした白いまだら模様の残ったあの尾根からだ。

葡萄は岩の狭間に育つ。岩のあいだには、あちこちにへこみがあって、ここにいつしか腐葉土がたまって来る（か、人間が運ぶ）。ヴァレー地方の人はわずかの使用可能な地面でも惜しむし、どんなものも失わないように気をつける

のである。はじめはそうだが、その内に、この岩壁のもっと上へと目をつける。そこには、ただ石を積んだだけの仕切りと仕切りの間を、ぐねぐねとどこで曲がるか分からないような径があって、その仕切り石の向こう側は、もう葡萄の木いっぱいだ。登っても登っても葡萄、葡萄。

しかしこの辺りの勾配はたいしたことはない。この小径は、荷車は通れない。せいぜいが、彼らが使用する後ろだけに小さな二輪がついている橇型の荷台だ。前方はすべり木を支えにする。小径は人間のためにだけ出来たもので、人間と相棒の騾馬の足と体型にしか合わせてない。山径は、人に容赦がない。ところが街道と呼ばれるものは歩く人のためにできるだけやさしくと、それなりに最大の努力と工夫がされているものだ。しかし、その代わり、ジグザグは多いし、距離は長くなって時間は何倍もかかる。しかも、こういう街道には、そこを通るトラックや稀な自動車のための宿駅しかない。

私たちは真っ直ぐ真正面から登る。顔を日陰に、背中を日に向けて登るから、陽射しは首筋の、襟と帽子の間に当たり、それも力一杯、焼けつくような手で押し倒してくるかんじがする。

ずっと葡萄が続く。意外なほど無秩序なのだ。〈パルシェ〉と土地で言う、いわゆる葡萄畑の小さな「区画」は、それぞれ所有者がおのおの独自の方法で栽培をしているのだが、ばらばらのタイルに似ている。傾き方が隣のタイルと違っていて、自然の一様な斜面にたいして、あるタイルは北から南へ傾き、あるタイルは東から西へ、あるいは西から東へと、まるではぎ取られたタイルである。取り木の結果、それがさらに分断されていることもあっ

細分化された葡萄の棚畑＊

て、燧石（ときによって水流）がキラキラしているような劣悪な土壌で、頁岩（けつがん）の破片が散らばり、所々、小径沿いには茨が繁茂している。

＊

最初の村　こうやってもう少し登っていくと、涼しいかぜが頬にあたる。焼ける思いの目も休まる。木陰があるのだ。思わず足早になる。谷の斜面のこの岩棚に彼らの石造りの家がある。収穫のときはここに泊まる。果てることのない旅の人なのだ。白い石造りの家ばかりで、二、三の小集落を形成している。そこは果樹の林で、風をいっぱいに受けた桃の木、梨の木、林檎の木がある。その周辺に丈の高い緑の濃い堂々とした草が生えている。彼らが骨折って引いてきた水路からの水で育ったのだ。いくつかの家には壁に絵が描かれている。〈シャンヌ〉（錫製の水差し）の絵がある。その水差しは、傾いてないのだがそこから水が噴出して、円弧を描いて脇に置いたコップに注がれているという図柄だ。

葡萄の収穫に下りていくのはここなのだ。ここで春先の何日かは過ごす。刈り込みの季節である。もっと上にある大きな村などは、その季節に、日曜とか、聖ヨセフの日の祭りなどに、音楽鳴らして、村全体が引っ越しをする。

＊

斜面　私たちもひと時を休息する。泉水盤の縁に腰をおろす。帽子をとる。額を濡らす。何をしているかというと、その大きな村というところへ行くのである。それはどこなのか？見えない。どれだけ首を伸ばしても見えない。影も形もみえない。目の前には、段々になった剣呑な斜面があるだけだ。道はまともに斜面に張り付いている。ここからは、山並みと空を分ける尾根が見えない。前景にあるのは、山の手前に張り出した部分だけだ。しかも、ここがとっかかりで、山そのものと、今は同じ高さに見えてしまうのだ。

小径は突然に、さらに急坂になり、松林の中に入る。渓流の川床のように、真っ直ぐに斜面を進む。しかもご丁寧に、所々に剥き出しの岩を置いてくれている。靴底が地面をとらえてくれない。岩がつるつるしていて、靴の鋲も、

騾馬の蹄鉄もひっ掛からないのだ。松の葉は黒く、幹は赤い。幹はねじれて撓んでいる。気ままな向きに枝が出ている。これまた節(ふし)が多くねじれている。赤い枝は空に血のように突き出て、空の青が際立って青い。際立っていると言えば、枝に広がる羽飾り様の葉は黒く、気まぐれな一刷毛という感じで、葉は密生しているので、隙間がわずかで、その隙間から空が、ガラスのようにというか、ステンドグラスの黒い枠取りの間の薄片のように超自然的な光に燦めいている。登る。滑る。岩の棚に到る。人一人立つのがやっとの広さ。そこの道際に遺体用の石がある。

＊

棺桶石　何かと言うと、これ、ちょうど大人の大きさほどの平らな敷石で、自然の計らいで、この場所にわざわざ置かれているように見える。そもそもお棺は重い。中に人が入っているのだから。「下で」死ぬと、ご本人の教区へ運び上げる。教会と、鐘撞堂の鐘が遺体を迎えてくれる。運ぶ人にはきつい。そこで、ここまで来ると、柩をこの石の上に降ろして休憩をするのである。

まだ半道だ。また腰を上げねばならない。砂だらけのところに出る。ここから坂がゆるくなり、窪地に入るが、ここに、道が削れてできた小麦粉よりも細かい砂がぎっしり溜まっているのである。

白いガスの中に入り込んだ。くしゃみがでる。姿は見えないが、何か鈍く当たるような音が、頭の上から聞こえる。続いて擦れるような音がする。騾馬の蹄鉄だ。ガスが晴れるのを待つ。荷鞍をつけた騾馬がぬっと姿を現す。その後

山へ上がる騾馬

ろに老人。パイプをふかしている。もじゃもじゃ髭のお爺さんで、長い髪の毛の大房がフェルト帽の下からのぞいている。帽子のリボンは日焼けと雨で赤茶けている。平地へ何か求めて下りて行くらしい。帰りはまた登るのだ。あいさつをする。少し言葉を交わす。こっちの言うことがほとんど分からない。向こうの言うこともほとんど分からない。私たちは登る。女の人とすれ違う。籠を背にして編物をしている。背中も手もふさがれている。それは、時間をむだにしないためだ。黒の縫取りのある灰色のスカーフを顔に巻き、その端が背中に垂れいる。俯いている。通りすがりにちらっとこっちを見る。「こんにちは」と言うと、向こうも「こんにちは」と言い、通り去る。

私たちは登る。頭の上の林が明るくなった。右手の繁みが疎らになっている。すると、斜面に張りつくようにして狭い畑があるのが見える。内側に石で囲った小さい区画がいくつもある。ライ麦、燕麦、そして小麦までが黄金色に実っている。燕麦は高く伸びて白くなって、ライ麦は長い髭を伸ばしている。ここの畑は、掲示板そのものだ。つまり大枠の中にまた長方形が並んでいて、いや、本当に、選挙時のポスターなのだ。風がときおり吹き抜けて行く。色さまざまなビラの表に湖面の波にも似た波紋を描いて風は抜けて行く。

ふと思う。「ここは一体どこなんだろう」。まだ村の姿が見えないのだ。ずいぶん歩いてきた。もう着いてもよさそうなのだ。いっこうに視界に現れない。それが、あったのだ。まるで舞台のどんでん返しだ。目の前で斜面が二つに割れて、見えるとか見えないとかの前に、もう村の中に入っていたのだ。十字架に架かっている大きな金色のキリスト像の向こうに、忽然と出現した真っ白な教会に対面したのである。教会の周りには、小さな畑に囲まれた家々が、ひざまづくかのようにして集まっている。平らな小径は、一種の広い道路となり、その両側に家がたっているのである。水車小屋を左手にやり過ごして行くと、踏段があって、子供がいっぱいいる。そこから石段がでていて、これはこの家の外階段となっている。

＊

教区　標高で、千二百メートルというところか。ここがその教区だ。ここが一生をすごす中心だ。洗礼を受けにく

るのもここだ。結婚しにくるのもここだ。死んだときに、永遠の寝所をささやかな墓地に作ってもらえるのもここだ。墓地は教会に隣接している。木の十字架がいっぱいある。三角形をした屋根のようなものがついていて傾いている。いくつかは色も褪せている。また、ここが冬の定住地で、この時は畑仕事もなくなる。冬以外といえば、半ば放浪の民だ。

村の裏には池がある。ときおり鴨が舞い降りて来る。アルプスを超える渡り鳥の大飛行から迷子になったのだ。一羽だけで泳いでいる。赤い色の足で、鏡のような水面にさざ波と波紋をつくりながら、そこに写っている空の青と雲の灰色をかき混ぜながら泳いでいる。

この池は灌漑施設の一つで、増水時には水を収め、一杯にしたり放水したりする役目をはたす。池はもうひとつあって、もっと上の林の中である。さらに登らなくてはならない。

＊

林　村は宿営地の一つでしかなく、山の民の行き来の中での一つの陣地にすぎない。

モミやカラマツの巨木の林に到る。休憩をする。風がきつくなる。足元は苔がはえてしっとりしている。大山脈の地層が造る山ひだにとりかかる。この山脈は巨大な足のようなものを前方に投げ出していて、そこが全体を支えているみたいだ。ところどころ、林間の空地にまた小さな家がいくつかある。炊事場があるだけ、せいぜい炊事場と一部屋。それと干し草の乾燥場。ここは飼料の草を作りに来るところだ。〈夏の郷（マヤン）〉だ。これも宿営地のひとつだ。焦茶色の木造の家で、牧草地の斜面に建てられている。木製の蜜蜂巣箱に（昔なら麦藁籠に）似ている。ここで一年のうち一、二カ月過ごすのである。

ここはまた踊りをしに来る場所でもある（踊りは司祭さんに禁止されていたので）。土曜とか日曜日に、そっと家を抜け出し、口風琴（オルゲット）を隠し持って、〈夏の郷〉に集合する。同じように家を抜け出してやって来た女の子たちも合流する。山中で、人けのないはずの〈夏の郷〉に、ある夜、突然人がいっぱいになってかそけき口風琴の音が漏れてく

る。遠くからでも笑い声と大声が聞こえる。そして、鋲底のでかい靴のいささか重いステップが床に響く。枝をわたる風の音。中から、高くてか細い音が流れ出てくる。吹きながら踊っているせいだろう、リードの振動音が大きくなったり小さくなったりしている。

＊

牧草地　苔の郷土（さと）。小さな果実の郷土。コケモモ、クワノミ、キイチゴ。老木になって倒れたモミの巨木。禾（のぎ）が生えている。山路からも奥まると、あちこちに、岩が、腐葉土の地層からにょっきり顔をだしてきた。服地から肘の骨がとび出している見たいだ。岩は前へ迫り出し、オーバーハングして小径を塞いでしまっている。ここまで来るとカラマツも低く細く、栄養不良のようになりはじめ、疎らになる。代わって、這松（アロール）が孤高を保って堂々と生えているのが見られるようになる。

そうする内に、もう一度岩棚に出る。標高二千メートル、あるいはそれ以上の所にある絶壁にぶら下がって引っ掛かっているような広い平地である。もう木は一本もない。草しかなく、夏にやっと芽が出て、すぐ枯れてしまう。するともう翌年の六月まで雪に被われ、九月になるとまた雪だ。

そんな場所にもかかわらず、まだ村人に会うのである。ここが最終地点なのだ。まだ村人の宿営施設があるのである。いまでは揃ってやって来ることはなくなったが、家畜はすべて引き連れてくる。村中の動物全部。家畜が移動するままに岩肌にも径が出来るので、危ない箇所には柵をつけたりすれば、季節がきたときの人の通り道（引越用の道でもある）となるわけだ。食糧、塩、大釜、チーズやバター作りのさまざまな道具を持って登る。この山の上で、七、八人でふた月生活する。バターは円錐形にして、日毎に層を増やす。毎日、新しいのを上へ重ね上げていき、都度、柔らかい表面にナイフで十字架の印をつけるのである。毎日、大釜の下で薪を盛んに燃やす。親方がそこで両手で牛乳をかき回す。日毎、小さなチーズもできていくが、それは、下山のときに、権利のある者だけで分ける。

石を積んだだけの背の低い家で、屋根は粘板岩の切り出したものを載せただけ。よく岩壁を背にしているのがある。

正直のところ、これは家とは言いにくい。せいぜい人と家畜の避難所というところだ。ベッドは、まあ蓋のない棺桶で、粗悪材で出来ている。二段になっていて、壁面に張りついている。台には敷藁が少し入れてある。この広く天井の低い、煙で燻された部屋は、ただ雨露をしのぐに足るというしろものである。光は、扉からと、大きな煙突から微かに入って来るだけだ。煙突は煤煙で燻銀になっている。凝乳酵素や羊脂肪（スイント）、湿った服、煙などで臭気が漂う。原始的な生活。古代の生活のようだ。アブラハム、ヘシオドス、テオクリトスの生活だ。その時代とほとんど同じ道具、器具を用い、桶、クリーム製造盥、擂粉木、丸匙、卵形匙、大匙、小匙と、たいていは木製である。こうやって小刀で巧みに作り出した同じような身の回り品を、昔も今も使っているのである。

ここでは今日でも何も変わっていない。山小屋の前の黒い泥濘の中に、〝酸葉（ランベ）〟の大きな葉が鮮やかな緑色の刺繍模様を作っている。豚が泥の中をころげている。その向こうを牛が重なり合うようにして通って行く。横に二列、三列になって、蹄で穿たれた岨道（そばみち）を進む。勾配が急すぎる箇所では、こうして転ばないよう列を分けて歩くのである。ときおり、首に懸けられたカウベルの音が鋭く響いてくる。鈍い音のもまじっているが、これは〈トゥパン〉製なのだ。トゥパンというのは、一種の打出しの銅製の大きな鈴。

ここから先は、もう何もない。あるのは岩と石ころ。まれに羊の群が見える。遠方の荒涼とした空間に、雲の影のように流れて行く。石と石のあいだに、わずか草が生えていることがある。羊、羊飼い。羊飼いの番小屋が絶壁の下にある。

＊

誰もいない氷河　それからはもうだれもいない。山の凹みの氷河が頭の上に迫っている。凹みは、氷河が毎日、前

岨道を登る牛の縦列

進したり後退したりしながら少しずつ削って作ったものだ。私たちは先史時代に入り込んだのだ。歴史以前にあったもの、しかも歴史時代に生きながらえてきたものを眼前にしているのだ。

大自然の真っ直中。ここでは自然のみが、自然の法則のみに従って自分のことを元気に決定していくのである。雲の流れを決め、上昇するか、下降するか、空いっぱいに広がるか、山頂付近にまといついて帽子になるか。昨日あった雲もいまは消えた。昨日なかった雲もいまは現れた。にわか雨、寒気、暖気を決め、突如、雷を振りかざす。いつも同じ地点を執拗に攻撃し、閃光とともに吹き飛ばす。下には人間の小屋が見える。屋根の下で縮み上がって、いつまでも尾を引く雷鳴を、ただおとなしく聞いている。雷鳴はこだまして音が大きくなって帰ってくる。山そのものが、怖い声で人に脅しをかけてきているみたいだ。ただ、山にはきっと言い分があるのだろう。が、人には分からない。

そのあとは静寂。それは、生命活動の中断というような意味での静寂ではない。生命の否定という意味での静寂でもない。息を一瞬ひそめると、心臓の鼓動が聞こえるような静寂、時計のチクタク音が聞こえるような静寂である。おおきな静寂だから、どんな幽(かそけ)き音も、一滴の水の滴りも聞こえる。山襞に迷い込んだコクマル鳥のとおくからの啼き声も何千倍にもその響きを大きくして聞こえる。恐ろしい沈黙、その一瞬のちに、この一枚布のような静寂というドレスを切り裂く音。それは瓦礫層の融雪崩落だ。険狭へ落ちていくので、砲声のようなすごい反響をしていく。根が緩んで、氷塔も崩れていく。巨大な氷の針峰で、根元を樵の斧でぶちかまされた大木のようにどっと倒壊していく。

しかし、また沈黙はもどって来た。態勢を整え、あなたを包みこんでくる。あなたの身体にぴったりまといついてくる。あなたを否定し、あなたのいのちをも否定するのが静寂の本質なのだ。あなたを孤立させるというのはそういう意味だ。沈黙は、おのれの純粋性を保つため、あなたを一切から引き離そうとしてくる。

＊

ヴァレーの郷(さと)を見渡す　平地から出立して、これ以上むりだという高みまで登ってみる。岩や雪が足元から消え、全身が虚空にふっと浮き上がる。場合によるが、歩いて十時間か十二時間か十四時間かかっている。突き出た高みに

到達したのである。そこからはヴァレー地方全体が見渡せる。

平らな底をした巨大な細長い籠の形をしていて、そのせり上がった縁は、ここから途切れることなく繋がっている。ぐるっと見渡しても切れ目はない。ベルン・アルプスとヴァレー・アルプスの二本が、離れてあって、それぞれ四方に支脈をだしている。ローヌ河まで迫り出し、たがいに前景になったり背景になったりしている。ここから一番近い支脈は、地平に落ちる夕日のせいで、濃い陰に被われてしまっている。しかし、遠くへいくほど、支脈は、薄青い霞のなかに浸り、霞を抜けた光と混じり合って蒼く柔らかい色をなし、いつしか霞とともに消えていく。

ローヌ河は、ひと時遮られ見えなくなり、少し先で姿を現す。蛇行するので、部分部分が視界から遮られ鱗が光るように見える。堤防に挟まれた箇所では真っ直ぐに正面に向かって進む。かと思うと、くねくね曲がったり、あるいは、網目状に腕を出し分岐して拡散して行く。三千メートルの眼下。あの分岐した流れは、せかされる本流から遁走し、行きたい方へ向かっているのだ。道路、その道路に沿った鉄道。灰色と黒の点々とした村が一つまた一つ。

そのはるか上、空との境目は真っ白。空の果てのこの白い縁取りは、まるで尾根に置かれた一本の長い長いすじ雲のよう。いつでも吹き飛んでしまいそうだ。それほど軽そうに見える。しかし、飛んではいかない。針と角（つの）でできたこのレースの縁取りは、花綱の装飾、空中のレース。けれども、空の青にしっかり縫い付けられている。東であろうと、南であろうと、右であろうと、前であろうと、後ろであろうと、どっちに顔を向けても、この空の国境（くにざかい）は、ちゃんとその両端が結び合わさっているのが分かる。空の高みにある国境、そこから目はどうしても下へ向く。

この国境に守られて生活をいとなむ人里が恋しくなったのだ。それで、みんなのいる巣へ向かって下りる。巣の中には、ここからは聞こえないが、音があり、ここから見えないが、道を三々五々行き交う人の姿がある。住居だけはかろうじて見える。家は山の斜面にへばりついたり、平野にぺったり置かれたりしている。

＊

落日　しかし、さいごに、見落としてはいけないものが今から始まる。その時が来た。そう日没だ。白かった雪の

嶺は色が変わり始めた。岩の上、森の上、渓谷の上、そして牧草地のずっと上の空で、何かが目覚める。それは、太陽が嶺の片隅、まさにふわっとした雪原にちょっと触れたと同時のことだ。月。蒼白かったのが銀色に、その銀色は温みを帯び、黄色くなり、輝きだす。星空。黄花の平原（ブトンドール）、ヒナギクの平原。空は、鮮やかな茜色（エスパルセット）したおうぎの花。それから盛りを過ぎたアカツメクサの色になる。谷はまったく影に入る。影の波は進む。影は山襞に入り込み、棚に広がり、上へ、上へと伸び、岩壁にあたる。やがて影のほうも透き通り、中から光を当てられたように、消えていく。残ったのは峰々の頂上部分だけ。まだ燦いている。それも三つになり、二つになり、とうとう最後の一つも、残り火が灰の中で消えるように蒼ざめていく。

訳注

1 本書に頻出するローヌ河は、ヴァレー地方の東端の氷河の融水と地下水から生まれ、ほぼ真西へ流れてレマン湖に注ぎ、ジュネーヴから抜けてフランスへ入り、徐々に南下し、リヨンの市内で北から下るソーヌ川と合流、地中海に注ぐ八一二キロの大河。地図参照

2 とくにローヌ河以南からスイス・イタリア国境の間に位置するアルプスをさす。ヴァレー地方のマッターホルンやモンテローザなどの高峰がその代表であるので、一般にはマッターホルン群またはヴァレー・アルプスと呼ばれる。スイスには、大まかに言うと、もう一つベルン・アルプスがある。ローヌ河をはさんで以北のアルプスで、ユングフラウやアイガーなどで知られる高峰がある。地図参照

3 アルプスの中程度の標高の牧草地で春と秋に牧童たちが山小屋に滞在し、放牧をし、搾乳、酪農製品をつくる。なお、より標高のたかいところで行なわれる夏季の放牧は〝アルパージュ〟と呼ばれる。

4 伝承によると、ローマのキリスト教徒団で、発祥がエジプトのテーベにあるので、この名がある。この軍団は、その信仰を守ろうとして、西暦二八五年に今のサン=モーリス町の近くのヴェロリエ村で殉教したと伝えられる。

5 サン=モーリス町の修道院教会に収蔵されていて現在も拝観できる。

6 国民皆兵の制度のため、現在でも、成人男子は銃などの武器を自宅で保存している。

7 この表現にそのままあたるものは見当たらないが、おそらく『労働と日々』のなかの「尽きる事ない河たちの清澄な流れを渡るときは、まずその美しい水面に祈りをささげよ」あたりがその典拠か。Les Travaux et les Jours（仏語訳版・O Euvres d' Hésiode' traduites par M. A. Bignan .1847.）より拙訳。

8 二〇〇五年現在の人口は約二七万人。